大慧普覚禅師年譜の研究（中）

石井修道

五年乙卯

師四十七歳。正月、赴蔡子応郎中天宮菴之命。泉南給事江公少明、刱新菴於小谿之上。延師以居。按韓子蒼答少明書云、窃知草菴得妙喜師開山。不喜妙喜得此菴、喜此菴得妙喜。然此道人、孤高絶俗、与世寡合。此正其所長。以故悪嫉者衆。惟曠懐偉度。乃能期之於物外。若得安居、使圜悟之風焜燿泉南。実叢林盛事。又按師答郡王孟公仁仲・枢密徐公師川書云、去春入閩、憩広因・洋嶼。及八箇月、而蔡子応、以莆中霊巌天宮菴見招、坐席未」（31a）煖、江少明、復以今新菴、遣人相延。遂領長楽五十三衲子、巻褫此来。四月初一、入菴。見今内外度夏者、二百人、皆叢林老成。従遊士夫、一時名士。如李参政漢老・江給事少明・蔡子応郎中・儲彦倫・李端友・蔡春卿・正卿諸公、咨問扣擊、拳拳不倦。雖菴居幽僻、正拙者之所宜也。一日、因師示衆挙自頌趙州庭前柏樹子話拈云、庭前柏樹子、今日重新挙。打破趙州関、特地尋言語。敢問大衆、既是打破趙州関。因甚特地尋言語。良久云、当初将為茅長短、燒了元来地不平。李参政、聞之忽然有省。乃謂師曰、若無後語、邴亦領略不得。別後以書与師曰、近」（31b）扣籌室、伏蒙激発蒙滞、忽有省入。顧惟根識暗鈍、平生学解、尽落情見。一取一捨、如衣壊絮行草棘中、適自纏繞。今一笑頓釈。欣幸可量。非大宗匠委曲垂慈、何以致此。自到城中、著衣喫飯、抱子弄孫、色色仍旧。既亡拘滞之情、亦不作奇特之想。其余夙習旧障、亦稍軽微。臨別叮嚀之語、不敢忘也。重念、始得入門、而大法未明。応機接物、触事未能無礙。更望有以提誨、使卒有所至。庶不玷於法席矣。蔡子応郎中、亦以書通所得於師。略曰、某近看狗子無仏性一語、恰似平地釘箇繋驢橛子。一除除却頓覚、廓然本無罣礙。一切文字語言、已没交渉。」（32a）故見得竹篦子、徹底分明。信知従上仏祖、切要為人処尤無多子。便見自己脚根下一段

大事、明如皎日、廓若太虚。従本已来不生不滅、不変不易、赤骨歴地、著一絲毫不得。直饒千仏出世、亦無摸索処。菩提・煩悩・真如・涅槃、皆為剰法。花梢・柳眼、種種勝妙境界、尽是榼藤阿羅。応時瓦解氷消、慶快有不可勝言者。因作頌曰、雲門箑子、逢人便挙。有眼無睛、徒労下語。二曰、狗子無仏性、截断衲僧命。打破趙州関、識得雲門病。枢、此回若不遇老師、空被従前一知一解、以為殊勝、埋没過此一生。豈不可惜也。師之所答、備於語録。」（32 b）

①曠＝曠㋑。

五（一一三五）年乙卯。

師、四十七歳。正月、蔡子応郎中の天宮菴の命に赴く。泉南の給事江公少明、新菴を小谿の上に刱む。師を延いて以って居せしむ。韓子蒼の少明に答える書を按ずるに云く、「窃に草菴の妙喜師を開山に得るを知る。妙喜の此の菴を得ることを喜ばず、此の菴の妙喜を得ることを喜ぶ。然も此の道人、孤高にして俗を絶し、世と合すること寡し。此れ正に其の長ずる所なり。以故に悪み嫉む者衆し。惟だ曠懐偉度なるのみ。乃ち能く之を物外に期す。若し安居を得ば、圜悟の風をして泉南を焜燿せしめん。実に叢林の盛事なり」。又、師の郡王孟公仁仲・枢密徐公師川に答える書を按ずるに云く、「去春、閩に入り、広因・洋嶼に憩う。八箇月に及んで、蔡子応、莆中の霊巌の天宮菴を以って招かれ、坐席未だ煖かならざるに、江少明、復た今の新菴を以って、人を遣して相い延かしむ」。遂に長楽の五十三の衲子を領して、裓を巻いて此に来る。四月初一、菴に入る。見に今、内外に夏を度す者、二百人にして、皆な叢林の老成なり。従遊の士夫は、一時の名士なり。李参政漢老・江給事少明・蔡子応郎中・儲彦倫・李端友・蔡春卿・正卿の如き諸公、咨問扣撃して、拳拳として倦まず。菴居幽僻すと雖も、正拙の者の宜しき所なり。「一日、因みに師、衆に示して、自ら頌する趙州の庭前の柏樹子の話を挙して拈じて云く、『庭前の柏樹子、今日重ねて新たに挙す。趙州の関を打破して、特地に言語を尋ねよ。敢て大衆に問う、既是に趙州の関を打破す。甚に因ってか特地に言語を尋ぬるや』。良久して云く、『当初、茅の長短と将為えるに、焼け了れば元来り地平かならず』」。李参政、之を聞いて忽然として省有り。乃ち師に謂って曰く、「若し後語無ければ、邴も亦た領略することを得ず」。別れて後に書を以って師に与えて曰く、「近ごろ籌室を扣き、伏して蒙滞を激発することを蒙って、忽ち省入すること有り。顧み惟うに根識暗鈍にして、平生の学解、尽く情見に落つ。一取一捨、壊絮を衣て草棘の中に行くに、適に自ら纏繞するが如し。今一笑に頓に釈く。欣幸量るべけんや。大宗匠の委曲に慈を垂るるにあらずんば、何を以ってか此を致さん。城中に到りてより、著衣喫飯、子を抱き孫を弄び、色色旧に仍る。既に拘滞の情を亡じ、亦た奇特の想を作さず。其の余の夙習旧障も亦た稍く軽微なり。別るに臨んで叮嚀の語、敢て忘れず。重ねて念うに、始めて入門を得て、大法未だ明らめず。応機接物するに、事に触れて未だ無礙なること能わず。更に望むらくは以って提誨有って、卒に至る所有らしめよ。庶わくは法席を玷すことなからんことを」。

*蔡子応郎中も亦た書を以って所得を師に通ず。略に曰く、「某、近ごろ狗子無仏性の一語を看て、恰も平地に箇の繋驢橛子に釘つに似たり。一除に除却して頓に覚すること廓然として本より罣礙なし。一切の文字語言、已に交渉没し。故に竹篦子を見得して、徹底分明なり。信に知りぬ、従上の仏祖、切に要す、為人の処、尤も多子無し、と。便ち自己の脚根下の一段の大事を見て、明かなること皎日の如く、廓きこと太虚の若し。本より已来た不生不滅、不変不易にして、赤骨歴地に一絲毫を著けることを得ず。直饒い千仏出世するも亦た摸索の処無けん。菩提・煩悩・真如・涅槃は、皆な剰法と為す。花梢・柳眼、種種の勝妙の境界は、尽く是れ榼槌阿羅なり。時に応じて瓦解氷消し、慶快の勝て言うべからざる者有り。因みに*頌を作りて曰く、『雲門の篦子、人に逢うて便ち挙す。眼有って睛無し。徒らに下語することを労す』。二に曰く、『狗子、仏性無し。衲僧の命を截断す。趙州の関を打破し、雲門の病を識得す』。枢、此の回、若し老師に遇わざれば、空しく従前の一知一解を殊勝と以為わされ、埋没して此の一生を過さん。豈に惜むべからざらんや」。*師の答える所は、語録に備われり。

六年丙辰

師四十八歳。住泉州雲門菴。四月十六日、圜悟和尚訃音至。挙哀拈香、指真云、這箇老和尚、一生多口、攪擾叢林。近聞已在蜀中、遷化了也。且喜天下太平①。雲門昔雖曾親近、要且不聞他説著箇元字脚。所以今日作一分供養。点一盞茶、焼此一炷香、熏他鼻孔。即非報徳酬恩。只要辱他則箇。召大衆云、既不聞他説箇元字脚。又無恩徳可報。何故特地作這一場笑具。還委悉麽。冤有頭、債有主。偶因失脚倒地。至今怨入骨髄。遂焼香。祭文略曰、某近②蒙大丞相張公、委僧祖秀報成都府昭覚圜悟先」(33 a)師、去年八月初八日示寂。闍維煙所及処、五色舎利如菽。道俗祖送、悲動閩③・蜀。間関万里、訃音不以時。乃以是年四月戊戌朔。十六日癸丑、成服設伊蒲之饌、用展哀思。嗚呼、先師道徳、高大麾斥八極。顧其得法之由、与夫平生出処、大略遭遇 明天子、表師叢林、照映先烈。上自宸扆公卿、下逮閭里負販草木昆虫。戸知之矣。寧復鉤棘叙致為世俗文字不情之具乎。独念孤陋、不肖蒙被剪払之賜。含悽哽塞、其忍黙然。自叙云云。重念、先師眷眷如此。其至者、豈於某有所私也。要之以付託之。重俾於鑊頭辺、覔本分種草。期得一箇半箇、恢張臨済」(33 b)已墜之宗、開鑿後昆眼目、貴不虚閲世。実先師之志願也。不肖安足以承遺訓。区区図報、未知所従。此其所以含悽哽塞、不能自己傾倒底蘊。先師実臨之。至晩小参。挙、僧問長沙、南泉遷化。向什麽処去。沙云、東家作驢、西家作馬。僧云、未審意旨如何。沙云、要騎便騎、要下便下。師云、今日忽有人問雲門圜悟老師遷化、向什麽処去、只向佗道、入阿鼻大地獄去也。未審意旨如何。飲烊銅汁、呑熱鉄丸。或問還救得也無。云、救不得。為什

麼救不得。是這老子家常茶飯。十月、李参政漢老・呂舎人居仁・鄭編修尚明、同訪師、令莆田鄭元亮写師頂相。三公」（34a）述讃、書其上。（讃見後録。）師自題曰、趙州云、似則打殺老僧。不似則焼却幀子。尽謂、此本逼真。独未見有下毒手者。放過一著、両手分付鈍叟。（鈍叟尚明自号也。）作釈迦出山相讃・趙州和尚・圜悟和尚真讃。

①太＝大㋐。②近＝迎㋐。③閩＝門㊥

六（一一三六）年丙辰。

師、四十八歳。泉州の雲門菴に住す。四月十六日、「圜悟和尚の訃音至る。哀を挙して拈香し真を指して云く、『這箇の老和尚、一生多口にして、叢林を攪擾す。近ごろ聞く、已に蜀中に遷化し了れり、と。且喜すらくは、天下太平なることを。雲門、昔し曽って親近すと雖も、要且他の箇の元字脚を説著するを聞かず。所以に今日一分の供養を作す。一盞の茶を点じて、此の一炷の香を焼き、他の鼻孔を熏ず。即ち徳に報じ恩に酬ゆるにあらず。只だ他を辱めんことを要すれば則箇のみ』。大衆を召して云く、『既に他の箇の元字脚を説くを聞かず。又、恩徳の報ゆべきこと無し。何故ぞ特地に這の一場の笑具を作す。還って委悉すや』。『冤に頭有り、債に主有り。偶たま脚を失って地に倒るに因る。今に至って怨み骨髄に入る』。遂に焼香す」。祭文の略に曰く、「某、近ごろ大丞相張公の僧祖秀の成都府の昭覚圜悟先師、去年八月初八日に示寂するを報ずるを委するを蒙むる。闍維の煙の及ぼせる処、五色の舎利、菽の如し。道俗祖送し、閩・蜀に悲動す。間関万里して、訃音、時を以ってせず。乃ち是の年の四月戊戌朔を以ってす。十六日癸丑、成服して、伊蒲の饌を設け、用いて哀思を展ぶ。嗚呼、先師の道徳、高大にして八極を麾斥す。其の得法の由を顧るに、夫の平生と出処は、大略、明天子に遭遇し、師として叢林に表わし、先烈を照映す。上は宸扆公卿より、下は閭里の負販、草木、昆虫に逮ぶ。戸之を知るや。寧ぞ復た鉤棘にして叙致の世俗の文字、不情の具と為らんや。独念孤陋、不肖にして、剪払せらるの賜を蒙むる。含悽哽塞、其の忍黙然たり。〈自叙に云云。〉重ねて念う、先師眷眷として此の如し。其の至る者、豈に某に私する所有らんや。之を要して以って之に付託す。重ねて钁頭辺をして、本分の種草を覔めしむ。一箇半箇を得て、臨済已墜の宗を恢張し、後昆の眼目を開鑿し、貴ぶらくは虚しく世を閲ざらんことを期す。実に先師の志願なり。不肖、安んぞ以って遺訓を承るに足らんや。区区図報、未だ従う所を知らず。此に其の含悽哽塞して自己の底の蘊を傾倒すること能わざる所以なり。先師実に之を臨む」。「晩に至りて小参す。挙す、僧、長沙に問う『南泉遷化す。什麼の処に去る』。沙云く、『東家に驢と作り、西家に馬と作る』。僧云く、『未審し、意旨如何』。沙云く、『騎んと要すれば便ち騎り、下んと要すれば便ち下る』。師云く、「今日忽ち人有りて雲門に『圜悟老師遷化す。什麼の処に去る』と問わば、只だ佗に道わん、『阿鼻の大地獄に入り去れり』。『未審し、意旨如何』。『烊銅の汁を飲み、熱鉄の丸を呑む』。或る人『還って救得すや』と問わば、云く、『救うこと得じ』。『什麼為に救うこと得じ』。『是れ這の老子の家常の茶飯なり』」。十月、李参政漢老・呂舎人居仁・鄭編集尚明、同じく師を訪ね、莆田の鄭元亮をして

師の頂相を写さしむ。三公、讃を述べて其の上に書す。〈讃は後*録に見ゆ〉。師自ら題して曰く、「趙州の云く、『似れば則ち老僧を打殺せよ。似ずんば則ち幀子を焼却せよ』。尽く謂く、此の本、真に逼れり、と。独だ未だ毒手を下す者の有ることを見ず。一著を放過して両手に鈍叟〈鈍叟は尚明の自号なり〉に分付す。釈*迦出山の相の讃・趙*州和尚・圜*悟和尚の真讃を作す。

七年丁巳

師四十九歳。住小谿雲門菴。按祭圜悟和尚文曰、大丞相張公徳遠、出蜀。先師餞別、臨分袂、握手以不肖孤蹤嘱之。尋訪以至忍泣。意欲推挽為出世利物之事。張公之在閩也以先師之故。忘位貌之崇、招以尺書。偶縁疾疹、不果一干①典謁。然某素有不出人前之戒。業已退蔵。豈復有所覬覦哉。又按」(34b)塔銘曰、浚在蜀時、勤親以師嘱、謂真得法髄。浚造朝、遂以臨安府径山延之。恐師痛事韜晦、必欲致師。移書泉守劉公彦脩、趣其行。不得已旛然而起。按題仏燈珣禅師祭文後云、余紹興丁巳春、赴臨安府尹之命、主国一法席。又按答泉守劉公書云、五月初、離泉南、冒大暑、艱苦備嘗。七月、方抵三衢。呂丞相、易疏帖、遣人至衢相候。超然居士趙表之、曩与師同法席于大梁欧阜。毎以不宦游②・出世為戒。時表之、偶辟南外宗正司。師赴径山、適会衢之官駅。師述偈見意云、超然・妙喜両同参。驀地相逢各負慚。我去住山君躍馬。前三三与後三三。十七」(35a)日、至臨安。二十一日、開堂於明慶寺。下座次、少卿馮公檝、問曰、和尚常言、不作這虫豸。為什麽、今日敗闕。対曰、尽大地是箇杲上座。你作麽生見。馮公擬議。師便掌之。時羣僚失色。馮大笑曰、長老与檝、仏法相見。二十四日、入院。九月、帰受業。衆請小参。説偈、山僧昔為童子時、一念知道出家好。却因脱白此伽藍、今日重来称長老。兵戈之後亡者多、現前耆宿喜無悩。以尊就卑離我人、咸請挙揚無上道。後生当発勇猛心、四海求師宜撥草。径山奉勧不虚施、弁口維摩須靠倒。次寧国。衆道友請陞座。説偈、只這些児住処、是吾生長之地。別去二十七」(35b)年、日月疾如弾指。政和元年辛卯、持鉢、至紹興七年丁巳、計二十七年。走徧天下叢林、意図出離生死。報答父母重恩、不是等閑遊戯。平生得箇剛強、方与仏祖出気。今朝依旧還郷、親戚百無一二。道是昔人猶非、道非昔人猶是。莫作是非論量、透過世間出世。慇懃普勧諸人、急着③眼睛看取。冬、持鉢隣郡。訪双槐居士鄭禹功於璉市。作仏燈珣禅師真讃・金華聖者画像讃。題呉氏六湛堂。

①干＝千甲。②游＝遊甲。③着＝著甲。

七(一一三七)年丁巳。

師、四十九歳。小谿の雲門菴に住す。圜*悟和尚を祭る文を按ずるに曰く、「大*丞相張公徳遠、蜀を出ず。先師、餞別して、袂を分つに臨んで、手を握って以って不肖の孤蹤に之を嘱す。尋

訪して以って忍泣に至る。意、推挽して出世利物の事を為さんと欲す。張公の閩に在るや先師の故を以ってす。位貌の崇を忘れ、招くに尺書を以ってす。偶たま疾疹に縁って、一も典謁に干ることを果さず。然して某、素より人前に出でざるの戒有り。業已に退蔵す。豈に復た覬覦する所有らんや」。又、塔銘を按ずるに曰く、「浚、蜀に在し時、勤、親しく師を以って嘱して、真の得法の髓と謂う。浚、朝に造って遂に臨安府の径山を以って之を延く」。師の痛事韜晦を恐れて、必ず師を致さんと欲す。書を泉守劉公彦脩に移して、其の行を趣す。已むことを得ずして旛然として起つ。仏燈珣禅師の祭文の後に題すを按ずるに云く、「余、紹興丁巳（一一三七）の春、臨安府の尹の命に赴き、国一の法席を主る」。又、泉守劉公に答える書を按ずるに云く、「五月の初、泉南を離れ、大暑を冒す。艱苦備に嘗む。七月、方に三衢に抵る」。呂丞相、疏帖を易え、人を遣わして衢に至りて相い候つ。超然居士趙表之、曩に師と法席を大梁の欧阜に同くす。毎に宦游・出世せざるを以って戒と為す。時に表之、偶たま南外宗正司に辟く。師、径山に赴いて、適たま衢の官駅に会う。師、偈を述べて意を見して云く、「超然と妙喜と両り同参。驀地に相い逢い、各おの慚を負る。我は去きて住山し、君は馬に躍る。前三三と後三三と」。十七日、臨安に至る。二十一日、明慶寺に開堂す。下座の次、少卿馮公檝、問うて曰く、「和尚常に言う、這の虫豸と作らず、と。什麼為に今日敗闕すや」。対えて曰く、「尽大地是れ箇の呆上座。你、作麼生が見る」。馮公、擬議す。師便ち之を掌く。時に羣僚、色を失う。馮、大いに笑って曰く、「長老と檝と仏法の相見なり」。二十四日、入院す。九月、受業に帰る。衆、請して小参せしむ。偈を説く、「山僧、昔し童子為りし時、一念に道を知り、出家するに好し、と。却た脱白に因って此の伽藍、今日重ねて来って長老と称す。兵戈の後に亡者多く、現前の耆宿、喜んで悩い無し。尊を以って卑に就き、我人を離れ、咸な請うに無上道を挙揚す。後生当に勇猛の心を発すべし。四海に師を求めて宜く撥草すべし。径山に勧を奉じて虚しく施さず。弁口の維摩、須く靠倒すべし」。寧国に次る。衆の道友請して陞座せしむ。偈を説く、「只だ這れ些児の住処にして、是れ吾が生長の地なり。別去して二十七年、日月疾きこと弾指の如し。〈政和元（一一一一）年辛卯、持鉢してより、紹興七（一一三七）年丁巳に至るに、計して二十七年なり〉。天下の叢林を走り徧り、意として生死の出離を図る。父母の重恩に報答するは、是れ等閑の遊戯にあらず。平生、箇の剛強を得て、方めて仏祖と気を出す。今朝、旧に依って郷に還るに、親戚、百に一二も無し。是と道えば昔人猶お非のごとし。非と道えば昔人猶お是のごとし。是非の論量を作すこと莫れ。世間・出世を透過せよ。慇懃に普く諸人に勧む、急に眼睛を着けて看取せよ」。冬、隣郡に持鉢す。双槐居士鄭禹功を璉市に訪ぬ。仏燈珣禅師真讃・金華聖者画像讃を作す。呉氏の六湛堂に題す。

八年戊午

師五十歳。乃入院之明年、衆将一千。皆諸方角立之士。師行首山令、起臨済宗。憧憧往来、其門如市。」(36 a) 学徒咨扣、日入玄奥。規縄不立、而法社粛如也。由是宗風大

振、号臨済再興。時給事馮公済川・無著道人妙摠①、同坐夏山中。馮館不動軒。日只一食、長坐不臥。按示永寧郡夫人法語云、一日因示衆、挙薬山初参石頭及馬祖因縁。済川・無著、纔聞提撕、各有省悟。下座。済川随師上方丈云、某甲理会得。師曰、居士如何。済川云、恁麽也不得。蘇嚧娑婆訶。不恁麽也不得。嗏哩娑婆訶。恁麽不恁麽総不得。蘇嚧嗏哩娑婆訶。師曰、梵語・唐言、打成一塊。咄哉、俗人、得此三昧。師遂至無著寮、挙済川語。無著云、妙摠②曽見郭象註荘子、識者以為荘子註郭象。師」(36 b)乃挙巌頭婆子話問之。無著遂作頌曰、一葉扁舟泛渺茫、呈橈舞棹別宮商。雲山海月倶抛棄、贏得荘周蝶夢長。師以頌示之曰、汝既悟活祖師意、両段一刀直下了。臨機一一任天真、世出世間無剰少。我作此偈為証明。四聖六凡、尽驚擾。休驚擾。碧眼胡児猶未暁。按為瑩上座普説云、因遣道謙往零陵、問訊紫巌居士。謙、中途打発大事。及帰、老僧半山亭望見便云、這漢和骨都換了也。謙、聞之大驚。這些験人処、設使釈迦・達磨来、亦不譲。作不動軒記。答枢密富公季申問道書。冬、行化呉門、作慧日雅禅師真賛。」(37 a)

①②摠=總㊀

八(一一三八)年戊午。

師、五十歳。乃ち入院の明年、衆、将に一千ならんとす。皆な諸方角立の士なり。師、首山の令を行じ、臨済の宗を起す。憧憧として往来し、其の門市の如し。学徒咨扣して、日に玄奥に入る。規縄立てずして、法社粛如たり。是に由りて宗風大いに振い、臨済の再興と号す。時に給事馮公済川・無著道人妙摠、同じく山中に坐夏す。馮、不動軒に館す。日に只だ一食のみにして、長坐して臥せず。永寧郡夫人に示す法語を按ずるに云く、「一日、因みに衆に示して、薬山の初めて石頭及び馬祖に参ずる因縁を挙す。済川・無著、纔かに提撕を聞いて、各おの省悟有り。下座す。済川、師に随って方丈に上りて云く、『某甲、理会し得たり』。師曰く、『居士、如何』。済川云く、『恁麽くも也た得ず。蘇嚧娑婆訶。恁麽くならずも也た得ず。嗏哩娑婆訶。恁麽く、恁麽くならずも総て得ず。蘇嚧嗏哩娑婆訶』。師曰く、『梵語・唐言、一塊を打成す。咄なる哉、俗人、此の三昧を得たり』。師、遂に無著の寮に至り、済川の語を挙ぐ。無著云く、『妙摠、曽って郭象の荘子を註するを見る。識者、荘子の郭象を註すと以為えり』。師乃ち巌頭婆子の話を挙して之に問う。無著、遂に頌を作して曰く、『一葉の扁舟、渺茫に泛ぶ。橈を呈し棹を舞して宮商に別る。雲山海月、倶に抛棄す。贏得たり荘周蝶夢の長きことを』。師、頌を以って之に示して曰く、「汝既に活祖師意を悟る。両段に一刀して、直下に了る。機に臨んで一一に天真に任す。世・出世間に剰少無し」。我、此の偈を作して為に証明す。四聖六凡、尽く驚擾せん。驚擾を休めよ。碧眼の胡児、猶お未だ暁めざるがごとし。瑩上座の為の普説を按ずるに云く、「因みに道謙をして零陵に往かしめ、紫巌居士に問訊せしむ。謙、中途に大事を打発す。帰に及んで、老僧、半山亭にて望見して便ち云く、『這の漢、骨に和して都て

換了せり』。謙、之を聞いて大いに驚ろく。這の些の人を験す処、設使い釈迦・達磨の来るとも、亦た譲らず」。不動軒の記を作す。枢密富公季申、道を問う書に答う。冬、化を呉門に行い、慧日雅禅師の真賛を作す。

九年己未

師五十一歳。是年、竜象駢集。坐夏者、一千七百有奇。挙悟本・道顔二座元、分座訓徒。按真讃曰、一千七百痴衲子、囲繞這箇無明叟。以神竜未有封号、敷奏于朝、蒙賜、侯曰広潤、廟曰霊沢。謁丞相張公徳遠于四安、求圜悟和尚塔銘。按画像讃曰、初識公於①京師、後十五年、再会呉之四安。又按答仏性泰禅師書、属者、訪張丞相弟兄、艤舟霅川。為数日之款、已為先師、製得塔銘。見刊石、佗日尋便奉寄。答陳季任少卿・趙道夫待制・劉彦脩宝文・彦冲通判問道書。作布袋和尚・臨済和尚画像讃。贈医師」（37b）王公継先・参政劉公大中頌。題超然居士六法図。作普照英禅師真讃、祭韓子蒼待制・江少明給事文。

①於＝于㊥

九（一一三九）年己未。

師、五十一歳。是の年、竜象駢集す。坐夏の者、一千七百有奇なり。悟本・道顔の二座元を挙げて、座を分ちて徒を訓かしむ。真讃を按ずるに曰く、「一千七百の痴衲子、這箇の無明叟を囲繞す」。神竜の未だ封号有らざるを以って、朝に敷奏して賜を蒙り、侯を広潤と曰い、廟を霊沢と曰う。丞相張公徳遠に四安に謁し、圜悟和尚の塔銘を求む。画像の讃を按ずるに曰く、「初め公を京師に識り、後に十五年して再び呉の四安に会す」。又、仏性泰禅師に答える書を按ずるに（云く）、「属者、張丞相弟兄を訪ね、舟を霅川に艤す。数日の款と為りて已に先師の為に塔の銘を製得す。石に刊するを見、佗日尋ねて便ち寄を奉ず」。陳季任少卿・趙道夫待制・劉彦脩宝文・彦冲通判の道を問う書に答う。布袋和尚・臨済和尚の画像の讃を作す。医師王公継先・参政劉公大中に頌を贈る。超然居士の六法図に題す。普照英禅師の真讃、韓子蒼待制・江少明給事を祭る文を作す。

十年庚申

師五十二歳。刱建千僧閣。時侍郎張公九成・状元汪公応辰、登山問道於師。張与師、談格物之旨。師曰、公只知有格物、而不知有物格。公擬議徐曰、師豈無方便邪。師笑而已。張曰、還有様子否。師曰、不見小説所載、唐有与禄山謀叛者。其人先為閫守。有画像存焉。明皇幸蜀、見之怒令侍臣以剣撃像首。其人在陝西、忽頭落。公聞之頓領厥旨。乃題偈」（38a）于不動軒壁間。曰、子韶格物、曇晦物格。欲識一貫、両箇五百。又一日、問曰、前輩既得了。何故理会臨済四料揀。則甚議論問。師曰、公之所見、只可入仏、不可入魔。豈可不従料揀中去邪。公遂挙、克符問臨済、至人境両俱奪、不覚欣然。師曰、余則不然。公曰、師意如何。師曰、打破蔡州城、殺却呉元済。公於言下、得大自在。嘗曰、某毎聞径山老人所挙因縁、豁然四達。如千門万

戸不消一踏而開。或与聯輿接席、登高山之上。或緩歩徐行、入深水之中。非出常情之流、莫知吾二人落処。然九成了末後大事、実在径山老人処。此瓣香、不敢孤負佗也。一日、与」(38 b)師座於方丈。偶僧持師頂相、求師自讃。師曰、無垢、試為題之。公点筆疾書曰、撃石揚沙、駆雷逐電。一触其鋒、神飛胆戦。未及領略、火蛇焼面。公擲筆于案、自有得色。師笑曰、意未尽在。公曰、和尚如何。師応曰、何不道、此是阿誰、径山老漢。公唯唯、復書之。答劉大中参政・張仲暘提刑・許寿源司理問道書。作祭喩弥陁文・仏燈珣禅師塔文。讃草堂和尚像。

十(一一四〇)年庚申。

師、五十二歳。千僧閣を刱建す。時に侍郎張公九成・状元汪公応辰、山に登りて道を師に問う。張と師と格物の旨を談ず。師曰く、「公、只だ格物有るを知るのみにして、物格有るを知らず」。公、擬議して徐ろに曰く、「師、豈に方便無からんや」。師笑うのみ。張曰く、「還って様子有りや」。師曰く、「見ずや、小説に載する所、唐に禄山と謀叛する者有り。其の人先に閩の守と為る。画像有って焉に存す。明皇、蜀に幸して之を見て、怒りて侍臣をして剣を以って像の首を撃たしむ。其の人、陝西に在って忽ち頭落つ」。公、之を聞いて頓に厥の旨を領ず。乃ち偈を不動軒の壁間に題す。曰く、「子韶格物、曇晦物格。一貫を識らんと欲せば、両箇五百なり」。又、一日、問うて曰く、「前輩は既に得了す。何故に臨済の四料揀を理会すや。則ち甚ぞ問を議論せん」。師曰く、「公の見る所、只だ仏に入るべきのみにして、魔に入るべからず。豈に料揀の中より去らざるべけんや」。公、遂に挙す、「克符、臨済に問う。人境両俱奪に至って覚えず欣然たり」。師曰く、「余は則ち然らず」。公曰く、「師の意如何」。師曰く、「蔡州城を打破し、呉元済を殺却す」。公、言下に大自在を得たり。嘗って曰く、「某、毎に径山老人の挙ぐる所の因縁を聞いて、豁然として四達す。千門万戸の一踏を消いずして開くが如し。或いは与に輿と聯なり席と接して高山の上に登り、或いは緩歩徐行して深水の中に入る。常情の流に出ずるにあらず、吾が二人の落処を知ること莫し。然も九成、末後の大事を了するは、実に径山老人の処に在り。此の瓣香、敢えて佗に孤負せざるなり」。一日、師と方丈に座す。偶たま僧の師の頂相を持して師に自讃を求む。師曰く、「無垢、試みに為に之に題せよ」。公、筆を点じて疾かに書して曰く、「石を撃ち沙を揚げ、雷を駆け電を逐う。一たび其の鋒に触れば、神飛び胆戦う。未だ領略に及ばずして、火蛇、面を焼く」。公、筆を案に擲って、自ら得色有り。師笑って曰く、「意未だ尽さず」。公曰く、「和尚、如何」。師応えて曰く、「何ぞ道わざる、此れは是れ阿誰ぞ、径山の老漢、と」。公、唯唯して復た之を書す。劉大中参政・張仲暘提刑・許寿源司理の道を問う書に答う。喩弥陁を祭る文・仏燈珣禅師の塔文を作す。草堂和尚の像を讃ず。

十一年辛酉

師五十三歳。千僧閣告成。師遣介泉南、求記於李漢老参政。其略曰、師於臨済、為十二代孫。其道大故、其摂者

衆、其門峻故、其登者難、其旨的故、其悟」（39 a）者親、其論高故、其聴者驚。且疑而同時者、譏毀嫌謗、不勝其忿。然四方学者、或自謂親証、或幾号罷参。皆肩摩袂属、沓来於座下。而公所遇之、未嘗仮詞気接。慇懃拒之而不去、疏之而益親。至於水洒梃逐、而戸外之履常満。平時不喜者、亦皆鉗喙結舌、歎息其不可及。吾不知、公之道、自有以使之耶。院去城百里、自唐国一禅師、始斬蓬・藋、駆竜・蛇、而居之、寺無常産。山之神竜、実助其縁化。公至之、始衆纔三百。二年法席大興、衆将二千、而院有僧堂二、不足以容。拋意於寺之東、鑿山開址、建層閣十楹、以盧舎那、南向嶢然居中、列千僧案位、於左右、」（39 b）設連牀、斎粥於其下。経始於十年春、越明年春、告成。余嘗問道於公、聞之而歎曰、非成是閣之難、致其衆之難、非致其衆之難、道行而不能使其衆不至之難。一閣之成、在公何足道而循襲齷齪之者以為奇特不亦陋甚矣哉。独喜其道行而衆従之。故為書其本末、且以諭夫。是年四月、侍郎張公九成、以父卒哭、登山修崇。師陞座。因説圜悟謂張徽猷昭遠、為鉄剗禅、山僧却以無垢禅、如神臂弓。遂説偈曰、神臂弓一発、透過千重甲。子細拈来看、当甚臭皮韉。次日、侍郎請説法。台州了因禅客、致問。有神臂弓一発、千重関鎖一時開、吹毛剣一揮、万」（40 a）劫疑情悉皆破之語。未幾遭論列、以張坐議朝廷除三大帥事。因及径山主僧、応而和之。五月二十五日、准　勅、九成、居家持服。服満別聴指揮。径山主僧宗杲、追牒責衡州。按張子韶答何中丞伯寿書曰、九成、忽棄老親、此心痛割、欲死無路。四月十四、奄経百日、顧此冤苦、無所舒豁。径山老人、道眼明徹、超然在生死之表。而一衆凡千七百人、皆不為名聞、精心学道。宜飯此処。可以少慰先考之心。是日登山、十八下山。而除帥在月末、事理昭灼、当益安命義。按師答馮給事済川書云、張子韶、四月十四日、以」（40 b）父卒哭。十六日、請陞座。十八下山。除三大帥、却在四月末。今坐此得罪。事体昭明、豈偶然哉。皆前報世中、因縁会遇、一切歓喜順受、償足自定矣。二十八日、除太保韓公世忠、少師張公俊①、充枢密使、少保岳公飛、充枢密副使。先是元豊戊午、慧雲塑釈迦文像。有異人丁生、語寺僧曰、若像之毀、是人嬰禍。于時慧雲後昆、忘丁生之讖、毀像新之、正此日師責衡州。七月、至貶所。時昭遠知臨川。師以偈戯之曰、小郡知州説大禅。因官置到気衡天。常攜剗子勘禅客、誰知不直半分銭。昭遠亦戯以偈酬師曰、小菴菴主放憨痴、愛向人前説是非。只因一句臭皮韉、幾乎断送老頭皮。是年冬、李参政泰発、以絶」（41 a）句寄師。其引云、適衡聴州郡欲免旬呈。師毅然不可曰、無以我累人。此意豈流俗泛泛者、所能窺之哉。感歎成小詩曰、十畝荒園旋結茅。芥菘挑尽到同蒿。聖恩未許還磨衲。且向堦前転幾遭。按為盧時用普説云、初到衡陽、諸処道友、送銭来。因遣両侍者、往嶽山・

潙山散処斎僧。衡人初不知是説。因普説、方与言。宣律師問韋馱天神、世間功徳、何者最大。曰、斎僧功徳最大。云云。人即聴信、稍知帰向焉。

①俊＝後㊀㊁

十一（一一四一）年辛酉。

師、五十三歳。千僧閣の成るを告ぐ。師、介を泉南に遣わして、記を李漢老参政に求む。*其の略に曰く、「師、臨済に於て十二代の孫為り。其の道の大なるが故に、其の摂する者衆し。其の門の峻なるが故に、其の登る者難し。其の旨の的なるが故に、其の悟る者親し。其の論の高なるが故に、其の聴く者驚く。且つ疑いて時を同くする者、譏毀嫌謗して其の忿に勝てず。然も四方の学者、或いは自ら親証と謂い、或いは幾ど罷参と号す。皆な肩摩袂属し、沓て座下に来る。而るに公の之を遇する所、未だ嘗って詞気を仮りて接せず。慇懃に之を拒めども去らず、之を疏んずれども益ます親し。水にて洒ぎ梃にて逐うに至れども、戸外の履常に満つ。平時喜ばざる者も亦た皆な喙を鉗じ舌を結んで、其の及ぶべからざるを歎息す。吾、知らず、公の道の自ら以って之を使う有らんや。院、城を去ること百里にして、唐の国一禅師の始めて蓬・蒿を斬り、竜・蛇を駆けて之に居りしより、寺に常の産無し。山の神竜、実に其の縁化を助く。公、之に至り、始めは衆、纔かに三百なり。二年にして法席大いに興り、衆将に二千にならんとして、院に僧堂の二つ有るも、以って容るに足らず。*刱意して寺の東に、山を鑿ち址を開き、層閣十楹を建て、盧舎那を以って、南向して毘然として中に居し、千僧の案位を列し、左右に連牀を設け、其の下に斎粥す。十（一一四〇）年の春に経始して、越えて明年の春、成るを告ぐ。余、嘗って道を公に問い、之を聞いて歎じて曰く、『是の閣を成すに難きにあらず、其の衆を致すに難し。其の衆の致すに難きにあらず、道行して其の衆をして至らざらしめること能わざるに難し』。一閣、成り、公に在りて、何ぞ道に足りて循襲齷齪の者、奇特と以為い、亦た陋甚せざらんや。独だ其の道行にして衆の之に従うことを喜ぶのみ。故に為に其の本末を書して、且く以って諭さんかな」。「*是の年四月、侍郎張公九成、父の卒哭を以って、山に登り修崇す。師陞座す。因みに圜悟が張徽猷昭遠を謂いて*鉄剗禅と為すに、山僧却って無垢の禅を以って*神臂弓の如しと説く。遂に偈を説いて曰く、『神臂弓、一たび発すれば、千重の甲を透過す。子細に拈じ来て看よ。甚の臭皮鞲にか当らん』。次の日、侍郎、説法を請う。台州の了因禅客、問を致す。『神臂弓、一たび発すれば、千重の関鎖一時に開く。吹毛の剣、一たび揮わば、万劫の疑情悉く皆な破す』の語有り」。未だ幾くならざるに論列に遭い、張の坐せらるを以って朝廷に三大帥に除す事を議す。因って径山の主僧に及び、応じて之に和す。五月二十五日、勅に准り九成は家に居して持服す。服満して別に指揮を聴く。径山主僧の宗杲は追牒し、衡州に責む。*張子韶の何中丞伯寿に答える書を按ずるに曰く、「九成、忽ち老親を棄て、此の心痛を割いて、死を欲するに路無し。四月十四日、奄しく百日を経て、此の冤苦を顧み、舒豁する所無し。径山の老人、道眼明徹し、超然として生死の表に在り。而して一衆凡そ千七百人、皆な名聞を為さず、精心に道

を学す。宜しく此の処に飯すべし。以って少しく先考の心を慰むべし。是の日、山に登りて、十八して山を下る。帥を除すこと月末に在り。事理昭灼として、当に安命の義を益すべし」。師の馮給事済川に答える書を按ずるに云く、「張子韶、四月十四日、父の卒哭を以ってす。十六日、陞座を請う。十八して山を下る。三大帥を除すこと、却た四月末に在り。今、此に坐して罪を得たり。事体昭明して、豈に偶然ならんや。皆な前報世中の因縁に会遇し、一切歓喜して順受し、償い自ら定むるに足らん。〈二十八日、太保韓公世忠に除し、少師張公俊、枢密使に充て、少保岳公飛、枢密副使に充つ〉」。是より先、元豊戊午（一〇七八）、慧雲、釈迦文の像を塑す。異人の丁生有って寺僧に語って曰く、「若し像の毀つことあらば、是の人、禍を嬰びん」。時に慧雲の後昆、丁生の讖を忘れ、像を毀ち之を新くするに、正に此の日、師、衡州に責めらる。七月、貶所に至る。時に昭遠、臨川を知す。師、偈を以って之を戯れて曰く、「小郡の知州、大禅を説く。官に因って到に置き、気、天を衝く。常に剗子を攜えて、禅客を勘す。誰か知らん、半分銭を直さざらん」。昭遠亦た戯れに偈を以って師に酬えて曰く、「小菴の菴主、憨痴を放にす。人前に向って是非を説くを愛す。只だ一句の臭皮鞟のみに因って、幾ど老頭皮を断送す」。是の年の冬、李参政泰発、絶句を以って師に寄す。其の引に云く、「衡に適いて州郡の旬呈を免ぜんと欲するを聞く」。師、毅然として可とせずして曰く、「我を以って人を累わすこと無からんや」。此の意豈に流俗泛泛たる者の能く之を窺う所ならんや。感歎して小詩を成して曰く、「十畝の荒園、旋や茅を結ぶ。芥菘挑げ尽きて同蒿に到る。聖恩未だ許さず、磨衲に還ることを。且く堵前に向って転ずること幾遭ぞ」。盧時用の為の普説を按ずるに云く、「初め衡陽に到るに、諸処の道友、銭を送って来る。因みに両侍者を遣わして、嶽山・潙山の散処に往きて、僧に斎す。衡人、初め是の説を知らず。普説に因って方めて言を与う。宣律師、韋馱天神に問う、『世間の功徳、何者か最大なる』。曰く、『僧に斎する功徳最大なり』云云」。人即ち聴くことを信じ、稍や帰向を知れり。

十二年壬戌

師五十四歳。居衡州廖季繹通直之西園。四方衲」（41b）子、雲委川会、擺糧景従。菴無以容来学。散処花薬・開福・伊山。遇小参・入室、会集其所。師則籃輿往、而拠丈室。其年蘊聞禅師、復至臨安。見有以費孝先之術、決前定休咎。因試問焉。其詩曰、鴈回始覚瀟湘遠、石鼓灘頭莫怨天。一住十年秦楚隔。木弓重続旧因縁。蓋謂衡陽及移梅陽矣。（衡陽有回鴈峰・瀟湘・石鼓灘。自辛酉、至庚午、移梅陽、恰十年。或云、古者以梅木為弓。）是年、接草堂禅師書。慰問曰、不続音問、逾年。常思慕矣。遊人所伝、径山道旺、安衆甚多。拙者常憂。古人云、道旺則魔盛、城高則衛生。今年中夏、忽聞難作、将謂小撓、秋来方得的音。乃知有此禍患。可謂、教法凌遅、叢林凋喪。遂致禍及弘護者、」（42a）頼吾仁、久煉真空、頓明心地、不以為憂。世諦如電光、身心如夢幻。楽然随順、那事無妨、善悪業報、今古難逃。以此段、霊光独耀、想所至処、法法円成、必有神明知

鑒、互相安穏。唯望寛懐、一致度外。昔黄檗勝・雲居舜、皆有此患。後得帰源、伝揚正法、心契仏祖。豈虚然耶。如来成道、魔難堅固。老拙暮景相侵、住世不久。今守残喘、待尽而已。汝正英鋭、莫忘初志。料想此生難得再晤。余宜保愛以順世縁。師答書。略曰、自到衡陽、一向謝絶賓客、四方書問、一切闊略。独於吾叔祖老師、未能忘懐。雖欲具状致起居問、亦無由得達視覧。然瞻仰教誨、未始頃刻」(42b)置念也。本宗上座、至蒙恵書、種種安慰、褒揚存撫、不替昔時。返覆数過、不忍去手、足認為物作則。曲折周旋之意、下情感戴、何時可忘。願叔祖竜天密護、法寿与趙州・安国師輩、斉年。某打箇筋斗回来、尚及依栽松道者例。妄意如此。不識老師那時肯放一線道否。師仍以金帛、嘱去僧蘊聞曰、恐汝到宝峰而此老去世、可設盛饌。以書読而祭之。既至草堂已圜寂。僧如所教也。

十二(一一四二)年壬戌。

師、五十四歳。衡州の廖季繹通直の西園に居す。四方の衲子、雲の如く委ね、川の如く会す。糧を攝すこと景の如くに従い。菴の以って来学を容るること無し。散じて花薬・開福・伊山に処せしむ。小参・入室に遇いて、其の所に会集す。師則ち籃輿にして往いて丈室に拠る。其の年、蘊聞禅師、復た臨安に至る。見ゆるに費孝先の術を以って、前定の休咎を決すること有り。因みに試みに焉に問う。其の詩に曰く、「鴈回りて始めて覚ゆ、瀟湘の遠きことを。石鼓の灘頭、天を怨むこと莫れ。一たび住して十年、秦と楚と隔たる。木弓の重ねて旧因縁を続ぐなり」。蓋し衡陽及び梅陽に移るを謂うか。〈衡陽に回鴈峰・瀟湘・石鼓灘有り。辛酉(一一四一)より庚午(一一五〇)に至り、梅陽に移りて恰も十年なり。或が云く、「古者は梅の木を以って弓と為す」〉。是の年、草堂禅師の書に接す。慰問して曰く、「音問を続かず年を逾ゆ。常に思慕す。遊人の伝うる所、径山の道旺んにして衆を安んずること甚だ多し、と。拙者、常に憂う。古人云く、『道旺んなるときは則ち魔盛んなることを、城高きときは則ち衛生ずることを』。今年の中夏、忽ち難の作るを聞いて、小撓と将謂えるに、秋来れば方に的との音を得たり。乃ち知りぬ、此の禍患有り、と。謂つべし、教法凌遅し、叢林凋喪す、と。遂に禍を致し弘護の者に及んで、吾が仁を頼り、久しく真空を煉り、頓に心地を明め、憂と以為わず。世諦、電光の如く、身心、夢幻の如し。楽然として随順して、那事、妨げ無く、善悪業報、今古逃ること難し。此の段を以って、霊光独り耀き、想所の至処に、法法円成し、必ず神明知鑒有り、互いに相い安穏す。唯だ寛懐を望むのみにして、一たび度外に致らんことを。昔し黄檗勝・雲居舜、皆な此の患有り。後に源に帰るを得て、正法を伝揚し、心、仏祖に契う。豈に虚然ならんや。如来成道するに、魔難堅固にす。老拙の墓景、相い侵し、住世久しからず。今、残喘を守り尽くを待つのみ。汝、正に英鋭なり、初志を忘るること莫れ。料想するに、此生、再び晤うを得ること難し。余、宜しく保愛して以って世縁に順ずべし」。師、書に答う。略して曰く、「衡陽に到りてより、一向に賓客を謝絶し、四方の書問、一切闊略す。独り吾が叔祖老師

に於て、未だ懐に忘ること能わず。具状して起居の問を致さんと欲すと雖も、亦た視覧に達することを得るに由無し。然れども教誨を瞻仰するに、未だ始めの頃刻に念を置かざるなり。本宗上座、至りて書を恵むを蒙り、種種に安慰し、褒揚存撫して、昔時に替えず。返覆数しば過ぎ、手を去るに忍びずして、認めて物の為に則と作すに足れり。曲折周旋の意、下情感戴し、何時か忘るべし。願くは叔祖、竜天密護して、法寿の趙州・安国師の輩と年を斉しくせんことを。某、箇の筋斗を打して回来し、尚お栽松道者の例に依るに及ばん。妄意、此の如し。識らず、老師、那時肯って一線道を放んや」。師仍ち金帛を以って去僧の蘊聞に嘱して曰く、「恐らくは汝、宝峰に到りて此の老の世を去らば、盛饌を設くべし。書を以って読んで之を祭せよ」。既に至るに、草堂已に圓寂す。僧、所教の如くす。

十三年癸亥

師五十五歳。按紀談云、明禅師、自辛酉随侍、過衡陽、日化於市。癸亥秋、辞往浙西持鉢。期明年上元」（43a）回。師送偈有云、蠹苴明大禅、孟浪絶方比。識得玄中玄、作得主中主。赤脚走長街、一日数百里。色力既勇猛、殊不畏寒暑。如是二三年、日日只如此。又云、甲子上元前、却要到這裏。其随師者多、効労如此。仍作画像讃付之。作丞相張公徳遠・向宣卿直閣画像讃。答内翰汪公彦章・舎人呂公居仁・隆礼郎中・夏志宏運使問道書。跋草堂和尚語録。閲維摩経有感、以頌示傅①禅師。

①傅＝伝㊀

十三（一一四三）年癸亥。

師、五十五歳。紀談を按ずるに云く、「明禅師、辛酉（一一四一）より随侍して、衡陽を過ぎ、日に市に化す。癸亥（一一四三）の秋、辞して浙西に往きて持鉢す。明年（一一四四）上元に回らんことを期す。師、偈を送りて云えること有り。『蠹苴たり明大禅。孟浪、方比を絶す。玄中の玄を識得して、主中の主を作得せり。赤脚にして長街に走り、一日に数百里なり。色力既に勇猛にして、殊に寒暑を畏れず。是の如く二三年、日日只だ此の如し』。又、云く、『甲子（一一四四）上元の前、却って這裏に到らんことを要す』。其れ師に随う者多く、効労、此の如し。仍ち画像讃を作して之に付す」。丞相張公徳遠・向宣郷直閣の画像の讃を作す。内翰汪公彦章・舎人呂公居仁・隆礼郎中・夏志宏運使の道を問う書に答う。草堂和尚の語録に跋す。維摩経を閲て感有り、頌を以って傅禅師に示す。

十四年甲子

師五十六歳。示提挙李献臣、法語二十六段。答汪聖錫状元・宗直閣問道書。作富季申枢密妙高堂」（43b）銘・延鴻寺鍾銘。題蔡知県小菴。張昭遠徽猷請作維摩讃。作六祖画像讃・祭衛寺丞文。

十四（一一四四）年甲子。

師、五十六歳。提挙李献臣に法語二十六段を示す。汪聖錫状元・宗直閣の道を問う書に答う。富季申枢密が妙高堂の銘・延鴻寺の鍾の銘を作す。蔡知県が小菴に題す。張昭遠徽猷、請して維摩の讃を作す。六祖の画像の讃・衛寺丞を祭る文を作す。

十五年乙丑

師五十七歳。正旦試筆。題韓司諫楽谷。藺庭彦知県、請作入定観音讃。作寂音尊者讃。題魏邦達侍郎浄心閣・汪聖錫①状元燕坐軒。示廖季繹知県・真如道人・空慧道人法語。答林少瞻・厳子卿・陳阜卿問道書。以頌代書、謝張丞相恵兜羅綿、戯題如如菴曰、契此如如理、豈論皮与髄。打破枯髑髏、百花生碓觜。

①錫＝錫㊀㊁

十五（一一四五）年乙丑。

師、五十七歳。正旦に試筆す。韓司諫楽谷に題す。藺庭彦知県、請して入定観音の讃を作す。寂音尊者の讃を作す。魏邦達侍郎が浄心閣・汪聖錫状元が燕坐軒に題す。廖季繹知県・真如道人・空慧道人に法語を示す。林少瞻・厳子卿・陳阜卿の道を問う書に答う。頌を以って書に代えて張丞相の兜羅綿を恵むを謝して、戯れて如如菴と題して曰く、「此の如如の理に契う。豈に皮と髄とを論ぜんや。枯髑髏を打破して、百花、碓觜に生ず」。

十六年丙寅」（44 a）

師五十八歳。解空居士侍郎劉公季高、手写華厳経一部、施師受持。仍請為衆普説、発明奥旨。師以衣盂。建閣於花薬寺之方丈、設龕像、以所施経、奉安其上。真如道人、請作補陁大士讃・文殊問疾讃、作死心和尚・普融平禅師・仏性泰禅師真讃。示陳次仲通判法語。作胡明仲侍郎・徐明叔郎中画像讃。答徐稚山侍郎・曽天隠宗丞問道書。等観居士廖季繹、以書告疾。示之頌云、左心小腸肝胆腎、右肺大腸脾胃命。於斯識得本来人、七顛八倒那伽定。

一六（一一四六）年丙寅。

師、五十八歳。解空居士侍郎劉公季高、華厳経一部を手写して師に施して受持せしむ。仍ち請して衆の為に普説して、奥旨を発明す。師、衣盂を以ってす。閣を花薬寺の方丈に建て、龕像を設け、施す所の経を以って、其の上に奉安す。真如道人、請して補陁大士の讃・文殊問疾の讃を作す。死心和尚・普融平禅師・仏性泰禅師の真讃を作す。陳次仲通判に法語を示す。胡明仲侍郎・徐明叔郎中の画像讃を作す。徐稚山侍郎・曽天隠宗丞の道を問う書に答う。等観居士廖季繹、書を以って疾を告ぐ。之に頌を示して云く、「左心小腸肝胆腎、右肺大腸脾胃命。斯に本来人を識得すれば、七顛八倒も那伽定なり」。

十七年丁卯」（44 b）

師五十九歳。侍者、以師与衲子、問答古今語句、請名。按題篇首云、余因罪居衡陽。杜門循省外、無所用心。間有衲子、請益。不得已、与之醻酢。禅者冲密・慧然、随手抄録。日月浸久、成一巨軸、持来、乞名其題。欲昭示後来、使仏祖正法眼蔵不滅。余因目之曰、正法眼蔵。尋以印本、寄曽文清公。公欲作頌謝、但得二句。曰、摩醯太多臨済少、唯有雲門師恰好。因復書請続後句。既啓封即曰、争如瞎驢滅却休、露柱燈籠皆絶倒。公得師指示、喜愜盈懐。已而以偈寄竜団茶与師。曰、蒼璧団団不暗投、舌端有眼

似离婁。莫言茗盌無三寸、解問如何是趙州。師答」（45a）之曰、趙州伝語龐居士、近日無端会喫茶。却笑旧来多鹵莽、不将竜焙入脂麻。作徐稚山侍郎画像讃。題鄉林居士向伯恭無熱軒。時李漢老参政薨背。師作文遣僧致奠。偶曰、泉南道友、零落殆尽、今唯蔡郎中一人而已。不若生祭之。乃戯為文曰、致祭于霊巌山下。半風半顛大脱空、居士之霊惟霊。鉄器市裏、牙人脱空、場中主将、黒豆換人眼睛。只做這般伎倆。将謂閻老不知、一向起模画様。而今死去見渠看。你有何憑仗、鑊湯炉炭横行、剣樹刀山逆上。我儂聞説欣然、獣漢攢①眉惆悵。人情敢不周旋。薄奠聊陳供養。郭郎線断俱休。嗚呼、哀哉。尚」（45b）享僧未至、而蔡公卒。復系之以詞而祭之。其略曰、嗚呼、始以前文、与公相戯。此意未達、公已瞥地。二俱偶然。初無実義、公既去矣。文焉敢棄。就而祭之。是法如是。性空道人、築屋於城之西門外、謂之廖氏山堂。遷師居之。

①攢＝欑㊊㊁。

一七（一一四七）年丁卯。

師、五十九歳。侍者、師の衲子の与の問答、古今の語句に名を請う。篇首に題すを按ずるに云く、「余、罪に因って衡陽に居す。門を杜じて省外を循して、用心する所無し。間に衲子有りて請益す。已むを得ずして、之の与に醻酢す。禅者冲密・慧然、手に随って抄録す。日月浸久して、一巨軸と成り、持ち来って其の題に名づけんことを乞う。後来に昭示して、仏祖の正法眼蔵をして滅せざらしめんと欲す。余、因みに之に目けて正法眼蔵と曰う」。尋いで印本を以って、曾文清公に寄す。公、頌を作して謝せんと欲して、但だ二句のみを得たり。曰く、「摩醯、太だ多く、臨済少し。唯だ雲門師のみ有りて恰も好し」。因みに復書して後句を続がんことを請う。既に封を啓いて即ち曰く、「争か如かん、瞎驢の滅却を休せんには。露柱燈籠、皆な絶倒す」。公、師の指示を得て、喜愜、懐に盈つ。已にして偈を以って、竜団茶を寄せて師に与う。曰く、「蒼璧団団として暗投せず。舌端、眼有って、离婁に似たり。言うこと莫れ、茗盌に三寸無し、と。問うことを解す、如何か是れ趙州」。師、之に答えて曰く、「趙州、語を龐居士に伝う。近日、端無く、喫茶を会す。却って笑う、旧来、鹵莽多きことを。竜を将って焙ぜず、脂麻に入る」。徐稚山侍郎の画像の讃を作す。鄉林居士向伯恭の無熱軒に題す。時に李漢老参政、薨背す。師、文を作し、僧をして致奠せしむ。偶たま曰く、「泉南の道友、零落して殆んど尽く。今、唯だ蔡郎中一人のみ。若かず、生きながら之を祭せんには」。乃ち戯れに文を為す。曰く、「祭を霊巌山の下に致す。半風半顛、大脱空、居士の霊なることは惟だ霊なり。鉄器市裏に、牙人脱空し、場中の主将、黒豆を人の眼睛に換う。只だ這般の伎倆を做すのみ。閻老の知らずと将謂えるに、一向に模を起して様を画く。而今死去して渠に見えよ。你、何の憑仗有ってか、鑊湯炉炭に横行し、剣樹刀山に逆に上る。我儂、聞説く、欣然たり。獣漢、攢眉して惆悵す。人情、敢えて周旋せず。薄奠、聊か供養を陳ぶ。郭郎、線断して俱に休す。嗚呼、哀しき哉」。尚お享僧未だ至らずして蔡公

卒す。復た之に系いで詞を以って之を祭る。其の略に曰く、「嗚呼、始めは前文を以って公と相い戯れり。此の意未だ達せざるに、公已に瞥地たり。二俱に偶然たり。初め実義無く、公既に去れり。文焉ぞ敢えて棄てん。就いて之を祭す。是の法是の如し」。性空道人、屋を城の西門の外に築き、之を廖氏が山堂と謂えり。師を遷して之に居せしむ。

十八年戊辰

師六十歳。正旦書事、寄無垢居士曰、上苑玉池方解凍、人間楊柳又垂春。山堂尽日焚香坐、長憶毗耶多口人。示黄子余知県法語。作李王見法眼画像讃・普化和尚画像・長霊卓禅師真讃。答劉季高侍郎・李彦嘉宝文問道書。題喩子才郎中観我菴。」(46 a) 作李泰発参政転物軒銘。示幻住道人智常法語。作祭薦福本長老文云、阿誰無生、阿誰無死。学道参禅、正要了此。汝今既了、吾復何憾。付明眼人、判此公案。

十八(一一四八)年戊辰。

師、六十歳。正旦、事を書して、無垢居士に寄せて曰く、「上苑の玉池の方に解凍せんとし、人間の楊柳、又、春に垂とす。山堂の尽日、香を焚いて坐し、長憶す、毗耶の多口の人を」。黄子余知県に法語を示す。李王、法眼に見ゆる画像の讃・普化和尚の画像・長霊卓禅師の真讃を作す。劉季高侍郎・李彦嘉宝文の道を問う書に答う。喩子才郎中の観我菴に題す。李泰発参政の転物軒の銘を作す。幻住道人智常に法語を示す。薦福本長老を祭る文を作して云く、「阿誰か生無く、阿誰か死無し。道を学び禅に参じて、正に此を了せんと要す。汝、今、既に了ぜり。吾、復た何ぞ憾みん。明眼の人に付す、此の公案を判ぜよ」。

十九年己巳

師六十一歳。答無垢居士論正法眼蔵書・向伯恭侍郎問夢書・李泰発参政・似表郎中問道書。示鄧子立直殿法語。跋周子充手書華厳経。作馬大師・龐居士讃・路彦捷寺丞画像①讃・祭劉彦脩宝文・彦礼直閣文。題自頂相、示継明禅人曰、光裕顕大、迺道之疣也。背道而馳求、迺其賊也。疣之与賊、若人」(46 b) 之身有蟯蛔、木之実有蠹②蝎。決欲血気充盛、而秀出於林、安得容此物於其間哉。疣之与賊、此之謂也。苟聞其道、而晦其跡、光裕顕大、不馳求而自昭著矣。苟未聞其道、而欲去其疣而亡其賊、則疣之疣賊之賊者也。吾仏聖人設教、亦如是而已。吾雖聞道矣、而不能晦其跡而蹈禍機、亦疣賊之謂也。継明禅人、学仏者也。画吾像而求自讃。因作是説、以示明而自警。非敢自談己徳。而復作疣之疣賊之賊者也。

①画=書㙓。②蠹=蠹甲

十九(一一四九)年己巳。

師、六十一歳。無垢居士の正法眼蔵を論ずる書・向伯恭侍郎の夢を問う書・李泰発参政・似表郎中の道を問う書に答う。鄧子立直殿に法語を示す。周子充の手書せる華厳経に跋す。馬大師・龐居士の讃・路彦捷寺丞の画像の讃・劉彦脩宝文・彦礼直

閣を祭る文を作す。*自らの頂相に題して、継明禅人に示して曰く、「光裕顕大、迺ち道の疣なり。道に背いて馳求すれば、迺ち其の賊なり。疣と賊と、人の身に蟯蛔有り、木の実に蠹蝎有るが若し。決して血気充盛にして、林に秀出せんと欲せば、安んぞ此の物を其の間に容るを得んや。疣と賊とは、此の謂なり。苟くも其の道を聞かば、其の跡を晦まし、光裕顕大にして馳求せずして自ら昭著せんや。苟くも未だ其の道を聞かざれば、其の疣を去り、其の賊を亡ぼさんと欲して、則ち疣の疣、賊の賊たる者ならんや。吾が仏聖人の教を設くも亦た是の如きのみ。吾、道を聞くと雖も、其の跡を晦し、而も禍機を蹈むこと能わざるも亦た疣賊の謂なり。継明禅人は仏を学する者なり。吾が像を画いて自讃を求む。因りて是の説を作して以って明に示して自ら警む。敢えて自ら己の徳を談ずるに非ず。復た疣の疣、賊の賊たる者と作すなり」。

二十年庚午

師六十二歳。師自讃。身著維摩裳、頭裹龐公帽。資」（47a）質似柔和、心中実躁暴。開口便罵人、不分青・白・皁。編管在衡陽、莫非口業報。永世不放還、方始合天道。為趨時者巧、加誣訕之語。取憐勢位、以是年六月二十五日、准　命、移梅州。取道郴陽、抵曲江、訪舎人朱公翊於西園。作雲門匡真禅師画像讃。七月十四日、至曹谿、留信宿。作昺禅師真讃。按題其語録云、紹興庚午夏、自回鴈、遷梅陽。道過韶石、礼老盧於窣堵波下。適遇堂頭明姪禅師、挙揚宗旨。二十六日、至南海、館于光孝方丈之西軒。凡三十二日。示何文綬・彭彦祥・鄭子寿・顧庭美・張彦清・元覧等法語。荘彦質」（47b）未画師像、預以素縑求讃。云、只此便是妙喜真、何用画工更忉怛。彦質擡眸子細看、南無急性王菩薩。八月二十九日、離五羊。九月十五日、抵羅浮。十月初三日、至貶所。按紀談、師抵梅陽。郡守謝朝議語僚属曰、朝廷編置所謂長老者、但一僧耳。兵馬東偏隙地、従其居止。既而僧行日至、幾数百指。施鍬钁、而平基址、運竹木、而縛屋廬。聴其指呼、無敢怠者。守雖聞其服勤如此、亦未知果何人也。於是延見一二、観其能為。南閩脩仰書記、適承命、乃与守従容弥日。語論英発、確古商①今。逢原左右、守復徴。等伍更有蘊異能者否。仰、遂告以負大経論者」（48a）有之、博極書史者有之、詩詞高妙者有之、翰墨飄逸者有之。其所以未能明徹、則仏祖大事因縁而已。是以不憚艱険、随侍而来、得依仁政。幸莫大焉。守且駭異。知其徒皆為法忘軀之士。自是於師日益加敬。

①商＝商㊀㊁

二十（一一五〇）年庚午。

師、六十二歳。師、自ら讃ず。*「身に維摩の裳を著け、頭に龐公の帽を裹う。資質、柔和に似て、心中、実に躁暴なり。口を開けば便ち人を罵り、青・白・皁を分たず。編管にて衡陽に在るは、口業の報に非ざるは莫し。永世に放還せずして、方に始

めて天道に合す。時に趨く者の為に巧に、誣訕の語を加う」。
憐を勢位に取って、是の年の六月二十五日を以って、命に准って、梅州に移る。道を郴陽に取り、曲江に抵り、舎人朱公翊を西園に訪ぬ。雲門匡真禅師の画像の讃を作す。七月十四日、曹谿に至り、留りて信宿す。昺禅師の真讃を作す。其の語録に題すを按ずるに云く、「紹興庚午（一一五〇）の夏、回鴈より、梅陽に遷る。道を韶石に過ぎ、老盧を窣堵波の下に礼す。適たま堂頭の明姪禅師に遇い、宗旨を挙揚す」。二十六日、南海に至り、光孝の方丈の西軒に館す。凡そ三十二日なり。何文綬・彭彦祥・鄭子寿・顧庭美・張彦清・元覧等に法語を示す。荘彦質、未だ師の像を画かずして、預め素縑を以って讃を求む。云く、「只だ此れ便ち是れ妙喜が真なり。何ぞ用いん、画工の更に忉怛たることを。彦質、眸を擡げて子細に看よ。南無急性王菩薩」。八月二十九日、五羊を離る。九月十五日、羅浮に抵る。十月初三日、貶所に至る。紀談を按ずるに（云く）、「師、梅陽に抵る。郡守謝朝議、僚属に語って曰く、『朝廷より編置せらるる所謂る長老は、但だ一僧のみ。兵馬の東偏の隙地に、其の居止を従す』。既にして僧行日に至り、幾んど数百指なり。鍬钁を施して基址を平げ、竹木を運んで屋廬を縛る。其の指呼を聴いて、敢えて怠る者無し。守、其の服勤すること此の如くなるを聞くと雖も、亦た未だ果して何人と云うことを知らず。是に於て一二を延見して、其の能く為すことを観る。南閩の俯仰書記、適たま命を承けて、乃ち守と従容として日を弥る。語論英発にして、古を確し今を商る。原に左右に逢い、守、復た徴す。『等伍に更に異能を蘊む者有るや』。仰、遂に告ぐるに『大経論を負う者之有り、博く書史を極む者之有り、詩詞高妙の者之有り、翰墨飄逸の者之有り。其の未だ明徹すること能わざる所以は、則ち仏祖の大事因縁のみ。是を以って艱険を憚らず、随侍して来って、仁政に依ることを得たり。幸、焉より大なるは莫し』と云うを以ってす。守、且つ駭異す。其の徒の皆な法の為に軀を忘るるの士なることを知る。是れより師に日に益ます敬を加う」。

二十一年辛未

師六十三歳。居梅州。太守遣其子謝純粋、求入道捷径。示之以法語八篇。作雪堂行禅師語録序・祭安撫劉公方明文。

二十一（一一五一）年辛未。

師、六十三歳。梅州に居す。太守、其の子の謝純粋をして、入道の捷径を求めしむ。之に示すに法語八篇を以ってす。雪堂行禅師語録の序・安撫劉公方明を祭る文を作す。

二十二年壬申

師六十四歳。示張観察法語。以頌代書寄張聖者。」（48b）賀福聖長老出世。答不二居士注金剛経求印証書。華心居士杜撰水陸儀文、書以頌滑稽。敏棕皮、帰蜀。作覚明居士夏志宏画像讃。

二十二（一一五二）年壬申。

師、六十四歳。張観察に法語を示す。頌を以って書に代えて、張聖者に寄す。福聖長老の出世を賀す。不二居士の金剛経を注して、印証を求むる書に答う。華心居士の杜撰の水陸儀文に書

をもて頌を以って滑稽す。敏*棕皮、蜀に帰る。覚*明居士夏志宏の画像の讃を作す。

二十三年癸酉

師六十五歳。作送黎文晦帰竜川序・南安巌主画像讃。跋雪峯空禅師語録。書古寄婺女使君・李公献臣。書古送立禅人帰双林曰、空手把鋤頭、油瓮捉泥鰍。歩行騎水牛、紙人火上遊。人従橋上過、猛虎当路坐。橋流水不流、高峰駕鉄舟。立禅帰到双林寺、説与渠儂且罷休。妙喜為君重説破。咄。且莫瞌睡。按雲臥書云、師是年坐間、凡有所説、則法宏①」（49 a）首座録之。自大呂申公執政、至保寧勇禅師四明人、得五十五段、而罷興。宏、遂以老師洋嶼衆寮牓、其間有兄弟、参禅不得、多是雑毒入心之語、取禀而立、為雑毒海。今刊本名武庫者、乃紹興十年春、信無言等、聞師語古道今、聚而成編。福清真兄、戯以杜預伝中武庫二字為名。及庚午、師偶見是集曰、其間亦有是我説話。何得名為武庫。以是知、武庫之名、実非師意也。

①勇＝永㊥

二十三（一一五三）年癸酉。

師、六十五歳。黎*文晦、竜川に帰るを送る序・南*安巌主画像の讃を作す。雪*峯空禅師語録に跋す。古を書し、婺*女使君・李*公献臣に寄す。古を書し、立*禅人の双林に帰るを送るに曰く、「空手にて鋤頭を把り、油瓮にて泥鰍（どじょう）を捉う。歩行して水牛に騎り、紙人の火上に遊ぶ。人、橋上より過ぎ、猛虎、路に当って坐す。橋流れて水流れず。高峰に鉄舟に駕る。立禅、帰りて双林寺に到り、渠儂（かれ）に説与することは、且く罷休せよ。妙喜、君が為に重ねて説破す。咄。且く瞌睡すること莫れ」。雲*臥書を按ずるに云く、「師、是の年、坐間に凡そ説く所有らば、則ち法*宏首座、之を録す。大*呂申公執政より、保*寧勇禅師は四明の人なり、に至るまで、五十五段を得て、興を罷る。宏、遂に老師の洋嶼の衆寮の牓に、其の間、兄弟有って参禅することを得ず、多くは是れ雑毒の心に入るの語を以って、取禀して立てて雑毒海と為す。今の刊本の武庫と名ずくるは、乃ち紹興十（一一四〇）年の春、信*無言等、師の古を語り今を道うを聞いて聚（あつ）めて編を成*す。福清真兄の戯れに杜預が伝の中の武庫の二字を以って名を為す。庚午（一一五〇）に及んで、師、偶たま是の集を見て曰く、『其の間に亦た是れ我が説話有り。何ぞ名づけて武庫と為すことを得ん』。是を以って知りぬ、武庫の名は、実に師の意に非（あら）ざるなり、と」。

二十四年甲戌

師六十六歳。太守楊公王休、建華厳会、請為衆普説。説偈略曰、紹興甲戌上元節、自在居士興善利。」（49 b）梅民服化咸歓喜、仁風恵沢家家至。善哉奇特大因縁、不可思議絶倫比。上祝吾　皇万万春、当与天地相終始。示唐彦挙覚軒法語。以頌代書、答帰宗華姪長老。題圜悟和尚所付楞伽経、授鼓山宗逮長老。題臨済正宗法語。跋古塔主語録。韋参軍、以花圃建菴、遷師居之。

二十四（一一五四）年甲戌。

師、六十六歳。太守楊公王休、華厳会を建て、衆の為に普説を請う。偈を説く、略に曰く、「紹興甲戌（一一五四）の上元の節、自在居士、善利を興す。梅の民、化に服して咸な歓喜す。仁風恵沢、家家に至る。善き哉、奇特の大因縁。不可思議にして倫比を絶す。上、吾が皇の万万の春を祝い、当に天地と相い終始すべし」。唐彦挙覚軒に法語を示す。頌を以って書に代えて、帰宗華姪長老に答う。圜悟和尚の付する所の楞伽経に題して、鼓山宗逮長老に授く。臨済正宗の法語に題す。古塔主語録に跋す。韋参軍、花圃を以って菴を建て、師を遷して之に居せしむ。

二十五年乙亥

師六十七歳。正旦、臨安浄空居士陳安常・不空居士張処俊、各具一百問答、遣价求印証。師題其後云、自問自答、自倒自起。処俊・安常、各説道理。一人揺頭、一人擺尾。蚊錐鉄牛、売弄口觜。賞伊胆大、来」（50a）呈妙喜。尽令而行、埋入地底。放過一著、各自看取。若不放過、打出骨髄。且道、是賞伊罰伊。明明向你道、尚自不会。豈況蓋覆将来。師自衡遷梅、六年之間、遐陬遠俗、靡不従其摂化。家絵其像、敬事虔粛。有若臨淮之大士・南安巌之定光。十二月、蒙　恩自便。按竜王殿記云、二十五年冬、　天度清曠、権綱独攬。　詔有司理冤。枉還之梅陽。梅為南方煙瘴之郡、医薬絶少、多有不及東帰者。按答経略方公務徳書云、往歳南遷。参随僧行零落瘴郷、六十三人、義難以忘。今之所存、于茲無幾間。或熏炉茗盌、必異於衆。蓋不忘南荒朝遊夕処」（50b）之義也。按為張県尉普説、在梅陽六年、受人供養。臨行菴中所有動使之物、尽散与人。平昔所収些施利、悉用辦斎。遍請合郡僧道士庶、并見任官、云。

二十五（一一五五）年乙亥。

師、六十七歳。正旦、臨安の浄空居士陳安常・不空居士張処俊、各おの一百問答を具して、价をして印証を求めしむ。師、其の後に題して云く、「自問自答し、自倒自起す。処俊・安常、各おの道理を説く。一人、頭を揺がし、一人、尾を擺う。蚊、鉄牛に錐し、売りて口觜を弄ぶ。伊が胆大にして、来って妙喜に呈することを賞む。令を尽して行じ、埋めて地底に入る。一著を放過して、各おの自ら看取せよ。若し放過せずんば、骨髄を打出せん。且く道え、是れ伊を賞するか、伊を罰するか。明明に你に道わん、尚お自ら会せず、と。豈に況んや蓋覆し将来せんや」。師、衡より梅に遷り、六年の間、遐陬の遠俗、其の摂化に従わざるはなし。家に其の像を絵し、敬事して虔粛たり。臨淮の大士・南安巌の定光の若き有り。十二月、恩を蒙りて自便す。竜王殿の記を按ずるに云く、「二十五（一一五五）年の冬、天度清曠にして権綱独攬す。有司に詔して冤を理む。枉く梅陽に還る。梅は南方の煙瘴の郡為り。医薬絶少し、多くは東に帰るに及ばざる者有り」。経略方公務徳に答える書を按ずるに云く、「往歳、南遷す。参随の僧、零落の瘴郷に行き、六十三人、義として以って忘れ難し。今の存する所、茲に幾く間も

無し。或は熏炉茗盌は、必ず衆に異る。蓋し南荒の朝遊夕処の義を忘れざるなり」。*張県尉の為の普説を按ずるに（云く）、「梅陽に在ること六年、人の供養を受く。行に臨んで菴中の所有（あらゆ）る動使の物、尽く散じて人に与う。平昔収むる所、些の施利、悉く用いて斎を辦ず。遍く合郡の僧道士庶幷びに見任の官を請すと云う」。

二十六年丙子

師六十八歳。正月二十一日、離梅陽。太守鄧公、酢賓礼委官兵津発。居民扶老攜幼遮道、祖餞眷恋、有不勝情者。蓋其道使之然也。取道汀州。二月、至灨川。時無垢居士侍郎張公子韶、自横浦、蒙旨守永嘉。師維舟俟之。用慰契闊。既見留連款語。遍賞名山、留題馬祖菴詩云、中有奇道人、機鋒如劈箭。謂師也。公因以自画像需讚。師点筆疾書、有貧」（51 a）児索旧債之句。已而聯舟東下、至廬陵。衆信請説法于祥符寺。作廬陵米価頌。次太和、遊青原。分袂於臨江之新淦、作湖湘之行。按無垢贈別詩云、相別十七年、其間無不有。今朝忽相見、対面成老醜。人生大夢耳①、是非安足究。欲叙惓惓懐、老大慵開口。公作湖南行、我赴永嘉守。重別是今日、南北又奔走。已歃相過盟、長沙不宜久。邑宰黄公元綬、迎師館于東山寺。三月十一日、被旨復僧。謝恩陞座、有青氈本是吾家物、今日重還旧日僧。珍重。聖恩何以報、万年松上一枝藤之句。示黄元綬如是居士法語云、渝川江亭、一見心已許之。既而来駅」（51 b）舎吐露。若合符契自慶。験人眼不譲古人。作黄世永主簿浄智菴銘。至宜春、憩于光孝寺。方外道友銭子虚計議、請為衆説法。時丞相和国張公徳遠、居長沙。其母秦国夫人、問道於師。按殿記曰、浚、窃惟先妣秦国太夫人、晩聞道于径山仏日大師、得自在無畏法。杲、有忠君愛物之志。非若声聞・独覚之私厭生死而楽寂滅也。是以浚与之遊。或者、迷惑世網、循利背義、排斥已異、移怒於師。有識者、憤之。秦国臥疾将亟曰、妙喜老師、此生無復見也。老婆有私恩未②報。和公凡三走介之宜春、趣師之行。由是兼程而至。秦国捐館矣。和国公語師曰、先妣」（52 a）願供養和尚一年、為報徳之私。今無復得。某謹遵遺訓。師幸少留、以九夏之期尽。某③敬奉、一慰先妣之願。二伸人子之心。師不可得而辞。遂館于光孝寺之東堂。六月、却饒州薦福之命、以偈遣四専使云、万死一生離瘴網、前程来日苦無多。収拾骨頭林下去、誰能為衆更波波。題大潙智禅師語録後。示羅孟弼法語。七月、秦国喪霊帰蜀。師亦次舟、至荊南。和公力挽同往。師無入蜀意。遂作桑梓之行。尼慧覚、以師頂相求讚。故有雖然未即過江東、且随覚禅看西蜀之句。中書舎人唐公文若、字立夫。於道自謂、有所趣向、毎聞蜀僧言。師有未語已前」（52 b）之験。立夫、時召赴行在、維舟謁師相見次、曰、莫是子西之後否。立夫曰、乃大

人也。師曰、尊丈、与某昔在無尽府第、相従甚久。不如公有箇無師自得底道理。但未喫得径山手裏竹篦在。立夫乃俛首感歎。然後炷香以致謝誠。遂連檣而之鄂渚。按示太守祠部熊公叔雅法語有云、近在渚宮、見一破家散宅底漢。欲操吾刀入吾室、便要殺人放火。被妙喜不動干戈即時擒下。不必見贓而後知其為賊。蓋指立夫也。又按立夫跋師示熊法語後云、径山贓物幷案款上納。異時鄂州有一点雑毒入心。定却翻案也。縛虎須急緩、則噬人事不両存、要識方」(53a)便。若只旗鎗両下、又渉廉繊。云云。別後以頌寄師云、人皆養子防身老、臨済生児不養家。三尺竹篦千古令、更無一物是生涯。武当軍節度使李公師顔、請説法于府第。示徐敦済提刑法語。已而下赤壁、次臨皋、望東坡雪堂。因作頌曰、力将正説分邪説、夢到黄州与恵州。竹屋数椽容老児、大江千古只東流。抵九江、太守朱公、請説法于能仁寺。而以廬山圜通。敦請住持。三辞而不獲。因挙道顔長老、補其処。然後解維、十月、至宣城、館于敬亭山。作普明琳禅師真讃。謁方外道友太守枢密楼公仲暉。作顔簡卿簡室銘・湯承事慶齢菴銘。適明州阿育王」(53b)山専使至、准　朝命住持。十七日、祗受次寧国、入山東、安存悼往、三宿而別。十一月、渡銭塘、由会稽。双槐居士鄭禹功参議、以詩迎師於旅亭。有底事病魔渾不染、只将正見洗蛮煙之句。帥座参政魏公良臣、請説法于能仁寺。十三日、就明州光孝寺、開堂。

十五日、入院。臘月、訪天童覚禅師及諸隣峰。

①大＝太。②未＝末(原)。③某＝其(甲)。

二十六(一一五六)年丙子。

師、六十八歳。正月二十一日、梅陽を離る。太守鄧公、賓の礼に酢い、官兵に委ねて津を発す。居民は老を扶け幼を攜えて道を遮り、祖餞眷恋して、情を勝たざる者有り。蓋し其の道の之を然らしむなり。道を汀州に取る。二月、灨川に至る。*時に無垢居士侍郎張公子韶、横浦より旨を蒙って永嘉に守たり。師、舟を維ぎて之を俟つ。用慰契闊たり。既に見えて留まりて款語を連ぬ。遍く名山を賞で、馬祖の菴に詩を留め題して云く、「中に奇なる道人有り、機鋒、劈箭の如し」。師を謂うなり。公因みに自画像を以って讃を需む。師、筆を点じて疾かに書するに、貧児、旧債を索むるの句有り。已にして舟を聯ね東下して廬陵に至る。衆、信って祥符寺に説法することを請う。*廬陵の米価の頌を作す。太和に次り、青原に遊ぶ。袂を臨江の新淦に分ち、湖湘の行を作す。*無垢の別れに贈る詩を按ずるに云く、「相い別れること十七年、其の間に有ならざるはなし。今朝忽ち相見す、対面するに老醜と成る。人生大だ夢なるのみ。是非、安んぞ究むるに足らん。惓惓の懐いを叙べんと欲うに、老大にして口を開くに慵し。公は湖南の行を作し、我は永嘉の守に赴く。重ねて別る是れ今日、南北に又、奔走す。已に相過の盟を歃る。長沙は宜しく久しかるべからず」。*邑宰黄公元綬、師を迎えて東山寺に館す。*三月十一日、旨を被って復僧す。恩を謝して陛座す。「青氈は本より是れ吾が家の物。今日重ねて旧日の僧に遷る。珍重。聖恩、何を以ってか報いん。万年松上

の一枝の藤」の句有り。黄元綬如是居士に法語を示して云く、「渝川江亭に一見して心に已に之を許す。既にして駅舎に来って吐露す。符契に合するが若く自ら慶ぶ。人を験す眼、古人に譲らず」。黄世永主簿の浄智菴の銘を作す。宜春に至り、光孝寺に憩う。方外の道友、銭子虚計議、請して衆の為に説法せしむ。時に丞相和国張公徳遠、長沙に居す。其の母秦国夫人、道を師に問う。殿記を按ずるに曰く、「浚、窃かに惟れば先妣秦国太夫人、晩に道を径山仏日大師に聞き、自在無畏法を得たり。呆、忠君愛物の志有り。声聞・独覚の私に生死を厭い、寂滅を楽うが若くにあらず。是を以って浚、之と遊ぶ。或る者、世網に迷惑し、利に循い義に背き、己異を排斥し、怒を師に移す。有識の者、之を憤る。秦国、疾に臥し将に亟ならんとして曰く、『妙喜老師、此の生に復た見ゆる無し。老婆、私恩有りて未だ報ぜず』。和公、凡そ三たび介を走らせ宜春に之きて師の行を趣さしむ。是に由りて兼程して至る。秦国、捐館せり。和国公、師に語りて曰く、『先妣、和尚に供養せんと願うこと一年、徳を報ゆるに私為り。今、復た得ること無し。某、謹んで遺訓に遵う。師、幸に少しく留って九夏の期の尽くるを以ってせよ。某、敬しく奉じて、一には先妣の願を慰めん。二には人子の心を伸べん』。師、得て辞すべからず。遂に光孝寺の東堂に館す」。六月、饒州の薦福の命を却けて、偈を以って四専使を遣りて云く、「万死一生、瘴網を離る。前程来日、苦、多く無し。骨頭を収拾して林下に去る。誰か能く衆の為に更に波波せん」。大潙智禅師語録の後に題す。羅孟弼に法語を示す。七月、秦国喪霊して蜀に帰る。師亦た舟に次り、荊南に至る。和公、力挽して同じく往かしむ。師、蜀に入る意無し。遂に桑梓の行を作す。尼慧覚、師の頂相を以って讃を求む。故に「未だ即ち江東に過ぎずと雖然も、且つ覚禅に随って西蜀を看ん」の句有り。中書舎人唐公文若、字は立夫なり。道に於て自ら謂えり、趣向する所有るは、毎に蜀僧の言を聞く、と。師、未語已前の験有り。立夫、時に召赴行在して、舟を維ぎ師に謁して相見する次、曰く、「是れ子西の後莫しや」。立夫曰く、「乃ち大人なり」。師曰く、「尊丈、某と昔し無尽の府第に在って相い従うこと甚だ久し。如かず、公の箇の無師自得底の道理有るには。但だ未だ径山の手裏の竹篦を喫得せざるのみ」。立夫乃ち首を俛めて感歎す。然して後に香を炷いて以って謝誠を致す。遂に連檣して鄂渚に之く。太守祠部熊公叔雅に法語を示すを按ずるに云えること有り、「近く渚宮に在って一りの破家散宅底の漢に見ゆ。吾が刀を操って吾が室に入り、便ち人を殺し火を放つを要せんことを欲す。妙喜に干戈を動かさずして即時ちに擒下せらる。必ずしも贓を見て後に其をして賊為るを知らず」。蓋し立夫を指すなり。又、立夫の師の熊に示す法語の後に跋するを按ずるに云く、「径山の贓物并び案款、上納す。異時に鄂州に一点の雑毒の心に入る有り。定んで却って翻案するなり。虎を縛るに急緩を須いば、則ち人を噬むに事として両存せず。方便を識ること要す。若し只だ旗鎗両下して又、廉纖に渉らん。云云」。別れて後、頌を以って師に寄せて云く、「人皆な子を養って身老を防ぐ。臨済、児を生んで家を養わず。三尺の竹篦、千古の令。更に一物無く是れ生涯なり」。武当軍節度使李公師顔、請うて府第に説法せしむ。徐敦済提刑に法語を示す。已にして赤壁に下り、

臨皋に次り、東坡の雪堂を望む。因みに頌を作して曰く、「力、正説を将って、邪説を分ち、夢、黄州と恵州とに到る。竹屋数椽、老児を容る。大江千古、只だ東流するのみ」。九江に抵り、太守朱公、請して能仁寺に説法せしむ。而して廬山の圜通を以って、敦請して住持せしむ。三たび辞するに獲ず。因みに道顔長老を挙して、其の処を補せしむ。然して後に解維して、十月、宣城に至り、敬亭山に館す。普明琳禅師の真讃を作す。方外の道友、太守枢密楼公仲暉に謁す。顔簡卿簡室の銘・湯承事慶齢菴の銘を作す。明州の阿育王山の専使至るに適い、朝命に准り住持す。十七日、祗受して寧国に次り、山東に入り、安存悼往し、三宿して別る。十一月、銭塘に渡り、会稽に由る。双槐居士鄭禹功参議、詩を以って師を旅亭に迎え、「底の事の病魔、渾って染まず。只だ正見をのみ将って、蛮煙を洗う」の句有り。帥座参政魏公良臣、請して能仁寺に説法せしむ。十三日、明州の光孝寺に就いて開堂す。十五日、入院す。臘月、天童覚禅師及び諸隣峰を訪う。

二十七年丁丑

師六十九歳。住育王。裹粮問道者、万二千指。百廃並挙、檀度響従、冠於今昔。雲巌典牛游禅師、以頌寄師云、五濁海底輾屎猪、躍出那辺三脚驢。鐸声既已喧四衢、雲間騰踏天馬駒。諦聴典牛一句子、」(54 a) 世上有你何用余。於是増修厨屋、鑿二新泉、曰妙喜、曰蒙。按泉銘、略曰、育王為浙東大道場。地高無水、僧衆苦之。紹興丙子、仏日受請、周旋其間、令僧広恭穿穴茲地為大池。鍬鍤一施、飛泉盆湧。知軍事秘監姜公、見而異之、名曰妙喜。無垢居士、為之銘末句有云、謂余未①然、妙喜其決之。師因説偈於其後。仍作蒙泉銘。曰、広利東泉曰蒙、源玲瓏万竅通。声淙淙出無窮、良施工不落空。銘泉者為誰、山僧妙喜翁。寺以衆多食貧、常住伏臘、不給陳請。海岸閑地僅千頃。命工開築、以為南畝、費緡銭十万余。師率八万四千人、結般若勝会、人出緡銭、余竭」(54 b) 衣盂、以成歳入、用贍斎厨。左丞相湯公思退、敷奏、詔賜其荘名般若。六月、弔衡陽太守石公彦和于新昌。遷仏智禅師塔。作正堂弁禅師語録序・広福寺鐘銘・東坡先生画像讃。跋文殊道禅師偈頌。答枢密楼公仲暉・節使曹公功顕・侍郎曽公吉甫・侍郎栄公茂実・妙徳居士黄公節夫問道書。示張晋彦運使・羅宗約参議・趙師厚観使・孫長文通判・鮑夢符教授・呂舜元機宜・郭仲堪知県・曹叔遅機宜法語。示内都知董徳之入道頌。作楊岐五世讃、黄竜忠道者・天童覚禅師二老揖譲図讃。時有太学上舎生楊麟、冠帯拝師於堂上、垂泣云、願従和尚」(55 a) 出家。語未②訖、擲下巾帽、袖中出剪刀、自落其髪。師疾呼左右、執手問其故。乃以実対。因摂授之。次日上堂云、已着槽廠、将錯就錯。騎却聖僧、不妨快楽。竜象蹴踏、非驢所作。堪笑、諸方妄生穿鑿、休穿鑿。祥麟只有一隻角。十二月、主天童覚禅師喪。

①未＝末(原)乙。②未＝末(原)

二十七（一一五七）年丁丑。

師、六十九歳。育王に住す。粮を裹み道を問う者、万二千指なり。百廃並な挙げ、檀度響従し、今昔に冠たり。雲巌典牛游禅師、頌を以って師に寄せて云く、「五濁海底、屎猪を輾ぶ。那辺に躍出す、三脚の驢。鐸声既已に四衢に喧す。雲間に騰踏たり、天の馬駒。諦聴せよ、典牛が一句子。世上、你に有り、何ぞ余を用いん」。是に於て、厨屋を増修して、二つの新泉を鑿つ。妙喜と曰い、蒙と曰う。泉の銘を按ずるに略に曰く、「育王は浙東の大道場為り。地高くして水無し。僧衆、之に苦しむ。紹興丙子（一一五六）、仏日、請を受け、其の間に周旋して、僧広恭をして穴を穿ち、玆の地に大池を為さしむ。鍬鍤一たび施せば、飛泉盆湧し、知軍事秘監姜公、見て之を異として、名づけて妙喜と曰う」。無垢居士、之に銘を為して末句に云えること有り、「謂うに、余、未だ然らざるに、妙喜、其れ之を決す」。師、因みに偈を其後に説く。仍ち蒙泉の銘を作して曰く、「広利の東泉を蒙と曰い、源、玲瓏として万竅通ず。声、淙淙として出ること窮り無く、良に工を施すに空に落ちず。泉に銘する者は誰とか為ん、山僧妙喜翁なり」。寺、衆多くして食貧きを以って、常住伏臘、陳請に給せず。海岸の閑地、僅かに千頃なり。工に命じて開築し、以って南畝と為し、緡銭十万余を費す。師、八万四千人を率いて、般若勝会を結び、人、緡銭を出し、余は衣盂を竭し、以って歳入と成り、用いて斎厨を贍く。左丞相湯公思退、敷奏して、詔して其の荘を般若と名づくと賜わる。六月、衡陽の太守石公彦和を新昌に弔う。仏智禅師の塔を遷す。正堂弁禅師語録の序・広福寺の鐘銘・東坡先生画像の讃を作す。文殊道禅師の偈頌に跋す。枢密楼公仲暉・節使曹公功顕・侍郎曽公吉甫・侍郎栄公茂実・妙徳居士黄公節夫の道を問う書に答う。張晋彦運使・羅宗約参議・趙師厚観使・孫長文通判・鮑夢符教授・呂舜元機宜・郭仲堪知県・曽叔遅機宜に法語を示す。内都知董徳之の入道の頌を示す。楊岐五世讃、黄竜忠道者・天童覚禅師二老揖譲の図の讃を作す。時に太学上舎生楊麟なるもの有り、冠帯にして師を堂上に拝し、泣を垂れて云く、「願くは和尚に従って出家せん」。語未だ訖らざるに、巾帽を擲下して、袖中より剪刀を出して、自ら其の髪を落す。師、疾かに左右を呼び、手を執って其の故を問う。乃ち実を以って対う。因みに之を摂授す。次の日、上堂して云く、「已に槽廠に着き、将錯就錯す。聖僧に騎却して、妨げず、快楽なるを。竜象の蹴踏して、驢の作す所にあらず。笑うに堪えたり、諸方の妄りに穿鑿を生ずることを。穿鑿することを休めよ。祥麟、只だ一隻の角有るのみ」。十二月、天童覚禅師の喪を主る。

二十八年戊寅

師七十歳。正月初十日、被　旨、遷住径山。二月二十八日、就霊隠寺、開堂。三月初九日、入院。坐夏千余衆。按塔銘、師之再住此山、道俗欽慕、如見其所親。雖老引接後進、不少倦。一日忽厨屋傾仆。蓋神竜欲師興建之始。師即①撾鼓示衆云、去歳育王方」（55ｂ）修了、今日径山又倒却雲堂。大衆一時驚、只有老僧、渾不覚。敢問大衆、因甚不

覚。豈不見道、不唖不聾不做。大家公、由是広其址以新之。重建孚佑王殿及厳像、設置東坡祠像於殿之右廡。示仏照居士鄭提幹・内都知張公一之・鄧伯寿直殿・永寧郡夫人善因法語。作王徳祖医師・栄茂実侍郎・方務徳侍郎画像讃。答蘇仁仲提挙問道書。孫知県擅改金剛経書以頌代書戯。答継明長老曰、既作虫豸、又住鶴鳴。如水入水、似金博②金。夜聴水流巌下石、暁看山起面前雲。此境此時誰得意。（道得末後句、則不孤負老僧。）九月、遣参徒之零陵、求孚佑王殿記於丞相張公」（56 a）徳遠。冬、行化嘉禾、次呉門、弔方外道友、信安郡王孟公仁仲。設無礙会于虎丘、以旌平日道義。長老霊沼、請作仏智裕禅師真讃。抵無錫枢密巫公子先而次、謂之錫山蓮社。請説法于南禅寺。陳阜卿侍郎撰疏、有十七年現居士身、不動本来面目。幾万里漂羅刹国、還帰旧処風光之句。孫尚書仲益、為前径山訥老、作塔銘。訥之嗣法最老、請師署名其後。由是師致書仲益。其答略曰、覿、頃見仏果於開宝。時公道価籍籍、満都国矣。靖康以還崎嶇兵乱、偶然不死。又罹罪罟、流竄嶺海、仰瞻一世竜象。如有仙凡之隔、只自媿歎。又曰、公高風絶塵已出」（56 b）世外、而非意之干、同逐客放臣遷貶之例。正如痴児搏空捕影、只堪一笑耳。然仏法遇厄、而後奇勝乃見。所以化服同異也。又曰、僧最出所賜書、開読三反、幸甚過望、承欲移舟臨賁衰老、至恵山、旋棹僧伽。危坐一塔之中、有熟視而不見者。一覩天人、信有命也。又曰、自公入呉、一仏出世矣。侯王而下、皆獲瞻礼。独覿尚未一詣。遂無以藉口。覿、方欲上書謝事。得請後書疏小間、当由臨安入山、摳衣聴法、一洗塵陋。又曰、皇恐大雅姪、帰依至道、曲蒙与進。庶幾、班斤郢斲也。訥老塔銘、重辱書名其後。衰陋有光焉。」（57 a）

①撾＝檛（原）（乙）。②博＝搏（乙）

二十八（一一五八）年戊寅。

師、七十歳。正月初十日、旨を被って、径山に遷住す。二月二十八日、霊隠寺に就いて開堂す。三月初九日、入院す。坐夏、千余衆なり。塔銘を按ずるに（云く）、「師の再び此の山に住するや、道俗の欽慕すること、其の親とする所に見ゆるが如し。老ゆと雖も、後進を引接すること少しも倦まず」。一日、忽ち厨屋の傾仆す。蓋し神竜の師の興建の始めを欲す。師、即ち鼓を撾ち衆に示して云く、「去歳、育王、方に修し了る。今日、径山、又、雲堂を倒却す。大衆、一時に驚く。只だ老僧のみ有って渾て覚えず。敢えて大衆に問う、『甚に因って覚えず』。豈に道うを見ずや、唖ならず、聾ならず、做さず、と」。大家公、是に由って其の址を広めて、以って之を新たにす。重ねて孚佑王殿及び厳像を建て、東坡祠の像を殿の右廡に設置す。仏照居士鄭提幹・内都知張公一之・鄧伯寿直殿・永寧郡夫人善因に法語を示す。王徳祖医師・栄茂実侍郎・方務徳侍郎の画像の讃を作す。蘇仁仲提挙の道を問う書に答う。孫知県の擅（ほしいまま）に金剛経を改むの書に、頌を以って書に代えて戯る。継明長老に答えて曰

く、「既に虫豸を作し、又、鶴鳴に住す。水の水に入るが如く、金の金を博えるに似たり。夜、水流を聴く、巌下の石。暁、山の起るを看る、面前の雲。此の境、此の時、誰か意を得ん。〈道得末後の句は、則ち老僧に孤負せず〉」。九月、参徒をして零陵に之かしめ、*孚佑王殿の記を丞相張公徳遠に求めしむ。冬、嘉禾に行化し、呉門に次り、*方外の道友、信安郡王孟公仁仲を弔う。*無礙会を虎丘に設け、以って平日の道義を旌わす。*長老霊沼、請して仏智裕禅師の真讃を作さしむ。*無錫の枢密巫公子先に抵りて次り、之を錫山蓮社と謂う。請して南禅寺に説法せしむ。*陳阜卿侍郎、疏を撰し、「十七年、居士の身を現す。本来の面目を動ぜず。幾くの万里、羅刹国に漂い、還た旧処の風光に帰る」の句有り。*孫尚書仲益、前の径山訥老の為に塔銘を作す。*訥の嗣法の最老、師を請して名を其の後に署わさしむ。是に由り、師、書を仲益に致す。其の答えの略に曰く、「覿、頃ろ仏果に開宝に見ゆ。時に公の道価、籍籍として、都国に満てり。靖康に以って崎嶇兵乱に還り、偶然死せず。又、罪罟に罹り、嶺海に流竄し、一世の竜象と仰瞻す。仙凡の隔り有るが如く、只だ自ら媿歎するのみ」。又、曰く、「公の高風絶塵にして已に世外に出で、意の干りにあらず。逐客放臣の遷貶の例に同じ。正に痴児の空を搏り影を捕うが如し。只だ一笑に堪えるのみ。然も仏法の厄に遇いて後の奇勝乃ち見る。所以に化して同異に服するなり」。又、曰く、「僧最、賜う所の書を出し、開読すること三反、幸甚、過望にして、承りて舟を移して、衰老に臨賁せんことを欲し、恵山に至り、棹を僧伽に旋す。一塔の中に危坐して、熟視すとも見えざる者有り。一たび天人を覩て、信に命有るなり」。又、曰く、「公の呉に入りてより、一仏の出世せり。侯王より而下、皆な瞻礼を獲たり。独だ覿のみ尚お未だ一詣せず。遂に以って藉口無し。覿、方に書を上って事を謝せんと欲す。請を得て後、疏を書して小間、臨安より山に入るに当り、摳衣して法を聴き、塵陋を一洗す」。又、曰く、「皇恐するに、大雅の姪の至道に帰依し、曲蒙与進す。庶幾わくは、班斤郢斲せよ。訥老の塔銘、重ねて辱しきこと名を其の後に書す。衰陋に光有り」。

二十九年己卯

師①七十一歳。正月、泛太湖。按示徐誠頌曰、紹興己卯正月旦、我因持鉢入太湖。徐誠権摂婆施羅、助我敷演此三昧。長老元弗、迎帰翠峰、為衆説法。作雪竇明覚禅師真讃。二月、却福州西禅之命。三月、求退於朝、纔進表、即渡江之四明。臨安府尹張侍郎偁、致書於師。其略曰、窃聞払衣禅席再挽莫回。翩然清風已趣高駕。此固不可以寵利勢力迎屈。然豈不念　聖天子以公名徳之盛、増重名山、以仏法護行闕。幸為小駐、以副上意。偁、職在守上②、朝命是依謹。差衙校陳、愈洊布区区、万冀深察。使張」（57b）京兆異日、為白蓮社中人。請自茲始矣。師即答書。四月、再帰径山。上堂、有重理旧詞連韻唱之語。　孝宗皇帝、在普安潛藩。七月二日、遣内都監黄彦節、命師就山中挙揚般若。説偈云、大根大器大力量、荷担大事不尋常。一毛頭上通消息、徧界明明不覆蔵。献上、上嘉歎之。是年、重建庫院・

行堂・西寮・倉院等処。作寂室光禅師語録序。作維摩示疾・九祖伏馱尊者・達磨面壁・二祖立雪・言法華画像讃。示徐敦立提刑法語。答丞相湯公進之・舎人張公安国問道書。五月、弔無垢居士於海昌、作文以祭之。六月、持鉢雪川。作端獅子讃。示給事劉公行簡」(58 a)入道頌・莫閏甫法語。題曹叔宝忘知軒。作道場弁禅師・護国遠禅師真讃。以頌代書、寄張欽夫定叟学士。冬、行化雲間。作船子和尚讃。内翰莫公儔、請為衆普説于普照寺。作三一堂銘。跋呂居仁送范司理序。薛令人、請題嗣法需長老真、故有常憶、首山好言語、新婦騎驢阿家牽之句。示崐山張知県法語。程詠之運使、以無垢居士与三川道人論、不愁念起、惟怕覚遅頌、請師書其後。無垢頌曰、念是賊子、覚是賊魁。搥殺賊魁、賊子何帰。堂堂大路、惟吾独之。越南燕北、遼東隴西。撒手便到、何慮何疑。神剣在山、鍔冷光寒。魑魅魍魎、莫之敢干。此名真」(58 b)覚、秦時輾轢。師説偈曰、説覚説念、翻背作面。無念無覚、何処摸索。起是誰起、覚是誰覚。豁開戸牖、太虚寥廓。撒手前行不顧人、秦時輾轢何時作。跋喩弥陁行実記。示内都知李公伯和・妙圜道人善宝・成季恭機宜法語。

①師=帥(原)。②上=土(原)(乙)。③雪=雲(乙)

二十九(一一五九)年己卯。

師、七十一歳。正月、太湖に泛ぶ。徐誠に示す頌を按ずるに曰く、「紹興己卯(一一五九)、正月旦、我、因みに持鉢して太湖に入る。徐誠権摂の婆、羅を施す。我を助けて此の三昧を敷演す」。長老元弗、迎えて翠峰に帰り、衆が為に説法せしむ。雪竇明覚禅師の真讃を作す。二月、福州西禅の命を却ける。三月、退くを朝に求め、纔に表を進め、即ち江を渡って四明に之く。臨安府の尹、張侍郎偁、書を師に致す。其の略に曰く、「窃かに聞く、衣を払って、禅席再び挽き回る莫し、と。翩然として清風、已に高駕に趣く。此れ固より寵利勢力を以って迎屈すべからず。然るに豈に聖天子の公の名徳の盛るを以って名山を増重し、仏法を以って行闕を護るを念ぜざらんや。幸いに小駐と為り、以って上の意を副えん。偁、職より上を守るに在り。朝命は是れ謹みに依る。衙に差い、陳ぶを校べ愈いよ洊りに布くこと区区にして、万冀深察す。張京兆をして異日、白蓮社中の人と為さしむ。請は茲より始まる」。師、即ち書に答う。四月、再び径山に帰る。上堂して、「重ねて旧詞を理めて、連韻を唱う」の語有り。孝宗皇帝、普安潛藩に在り。七月二日、内都監黄彦節を遣わして、師に命じて山中に就いて般若を挙揚せしむ。偈を説いて云く、「大根大器、大力量、大事を荷担して尋常ならず。一毛頭上に消息を通ず。徧界明明として覆蔵せず」。上に献ずるに、上、之を嘉歎す。是の年、重ねて庫院・行堂・西寮・倉院等の処を建つ。寂室光禅師語録の序を作す。維摩示疾・九祖伏馱尊者・達磨面壁・二祖立雪・言法華画像の讃を作す。徐敦立提刑に法語を示す。丞相湯公進之・舎人張公安国の道を問う書に答う。五月、無垢居士を海昌に弔い、文を作して以って之を祭る。六月、雪川に持鉢す。端獅子の讃を作す。給事劉公行簡

の入道の頌・莫閏甫に法語を示す。曹叔宝の忘知軒に題す。道場弁禅師・護国遠禅師の真讃を作す。頌を以って書に代えて、張欽夫定叟学士に寄す。冬、雲間に行化す。船子和尚の讃を作す。内翰莫公儔、請して衆の為に普照寺に普説せしむ。三一堂の銘を作す。呂居仁の范司理を送る序に跋す。薛令人、請して嗣法の需長老の真に題さしむが故に、「常に憶う、首山の好き言語、新婦、驢に騎り、阿家牽く、を」の句有り。崐山張知県に法語を示す。程詠之運使、無垢居士の三川道人と論じて、「念の起るを愁えず、惟ぜ覚の遅きを怕る」の頌を以って、師に其の後に書するを請う。無垢の頌に曰く、「念は是れ賊子、覚は是れ賊魁なり。賊魁を搥殺して、賊子、何にか帰らん。堂堂たる大路、惟だ吾のみ独り之く。越の南、燕の北、遼の東、隴の西。手を撒して便ち到る。何をか慮り、何をか疑わん。神剣、山に在り、鍔、冷かに、光、寒し。魑魅魍魎、之と敢えて干ること莫し。此を真覚と名づけ、秦時の輾轢たり」。師、偈を説いて曰く、「覚と説き、念と説く、背を翻して面を作す。念無く、覚無し。何の処にか摸索せん。起は是れ誰か起なる、覚は是れ誰か覚なる。戸牖を豁開して、太虚寥廓たり。手を撒して前行するに、人顧みず、秦時の輾轢、何の時か作さん」。喩弥陁行実記に跋す。内都知李公伯和・妙圜道人善宝・成季恭機宜に法語を示す。

三十年庚辰

師七十二歳。三月、丞相湯公、請説法于霊芝寺、以偈送師。育王開田次韻曰、毛錐子上通消息、大勝新開百丈田。居士不離香積界、老僧贏得日高眠。孝宗皇帝、居建邸。内都監黄彦節侍次、誦於妙喜処、所授祖師偈、心随万境転、転処実能幽。随流認」（59 a）得性、無喜亦無憂。上聞之、理与神遇、欣愜盈懐。委内都監、訪師請陞堂。遂説偈以献曰、豁開頂門眼、照徹大千界。既作法中王、於法得自在。上甚嘉納焉。尋復請為衆説法。親書妙喜菴三字、及製真讃、題曰文囿、讃真呈妙喜。師演成四偈。其引曰、宗杲伏承文囿、至人頒示妙讃。大哉言乎。而思惟所不能及也。宗杲雖不敏、演成四章、謹繕写上呈。伏乞一目而擲之。偈見前録。示顕徳居士御帯黄公仲威入道頌云、空却十方三世、去却千非一是。目前烜赫光明、日用随縁遊戯。題知省張公宗元随分楼・董公徳之仮山。跋王日休竜舒浄土文。汪養源」（59 b）運使、請作維摩居士讃。作孫長文画像讃・道端禅客端硯銘。示法音首座竪刹竿法語。以頌送鄧子立直殿還都下・明長老帰長蘆。作祭超然居士趙表之文。冬、行化宛陵次、当途抵建鄴。留守尚書韓公仲通、率僚属、請説法于保寧寺。長老曇華、請為衆普説於鍾山。嗣法了明、迎之葦江、少休僕役。題呂文靖公影堂遺事。次程子山侍講韻、示可昇禅人。示留守韓公法語。作達磨渡蘆讃。

三十（一一六〇）年庚辰。

師、七十二歳。三月、丞相湯公、霊芝寺に説法を請い、偈を以って師を送る。育王、田を開き、韻を次いで曰く、「毛錐子上、

消息を通じ、大いに新開の百丈の田に勝る。居士、香積界を離れず、老僧、贏ち得たり、日に高く眠ることを」。孝宗皇帝、建邸に居す。内都監黄彦節、侍する次、妙喜の処に於て、授くる所の祖師の偈を誦するに、「心は万境に随って転ず。転処実に能く幽なり。流れに随って性を認得し、喜も無く亦た憂も無し」と。上、之を聞いて、理と神と遇い、欣愜して懐に盈つ。内都監に委ね師を訪ねて陞堂を請わしむ。遂に偈を説いて以って献じて曰く、「頂門の眼を豁開して、大千界を照徹す。既に法中の王と作りて、法に於いて自在を得たり」。上、甚だ嘉納す。尋いで復た請して衆の為に説法せしむ。親しく妙喜菴の三字を書し、及び真讃を製して、題して文囿と曰い、真を讃じて妙喜に呈す。師、四偈を演成す。其の引に曰く、「宗杲、伏して文囿を承り、至人、妙讃に頒示す。大なる哉、言や。思惟して及ぶ能わざる所なり。宗杲、不敏と雖も、四章を演成して、謹んで繕写して上に呈す。伏して乞うらくは、一目して之を擲たんことを」。偈、前録に見ゆ。顕徳居士御帯黄公仲威の入道の頌を示して云く、「十方三世を空却して、千非一是を去却す。目前の烜赫たる光明、日用縁に随って遊戯す」。知省張公宗元の随分楼・薫公徳之の仮山に題す。王日休の竜舒浄土文に跋す。汪養源運使、請して維摩居士の讃を作さしむ。孫長文の画像の讃・道端禅客の端硯銘を作す。法音首座に刹竿を竪つる法語を示す。頌を以って鄧子立直殿の都下に還り・明長老の長蘆に帰るを送る。超然居士趙表之を祭る文を作す。冬、宛陵を行化する次、途に当って建鄴に抵る。留守尚書韓公仲通、僚属を率いて、説法を保寧寺に請う。長老曇華、請して衆の為に鍾山に普説せしむ。嗣法の了明、之を葦江に迎え、少しく僕役に休す。呂文靖公の影堂の遺事を題す。程子山の侍講の韻に次ぎ、可昇禅人に示す。留守韓公に法語を示す。達磨渡蘆讃を作す。

三十一年辛巳

師七十三歳。正月、舟次儀真。太守徐公敦立、請説法于天寧寺。適州学文宣王殿。建造未円、学徒告」(60a)師有以成就。師以説法施利二十万、而助之。次日、復攜軸求書、法語以為引導。故有葫蘆①必竟遭藤纏之句。至京口、謁劉公信叔太尉。訪呉傅朋郎中、請書法宝輪蔵四字。遊浮玉、次海門、作夢菴信禅師真讃。金壇、謁参政湯公致遠、溧陽、訪方外道友劉季高侍郎、取道荊谿而帰。跋顧凱之所画維摩像。四月、謝事径山。五月初一、遂所請知省李公伯和、施銭重建明月堂、為師佚老之居。秋、往受業、慶懺輪蔵。按行記、妙喜老師、辛巳夏、謝事径山、得請于朝。九月、之山東。歴陽張孝祥、自宣城来、致敬請法要、而別施衣盂。重建選仏堂。作銭処和侍郎讃。」(60b)

①蘆=盧(原)(乙)。

三十一(一一六一)年辛巳。

師、七十三歳。正月、舟にて儀真に次る。太守徐公敦立、請して天寧寺に説法せしむ。州学の文宣王殿に適く。建造未だ円かならざるに、学徒、師の以って成就有るを告ぐ。師、説法して施利二十万を以って之を助く。次の日、復た軸を攜えて書を求め、法語を引導と以為う。故に「葫蘆必竟、藤纏に遭う」の句

有り。京口に至り、劉*公信叔太尉に謁す。呉*傅朋郎中を訪ね、法宝輪蔵の四字を書んことを請う。浮玉に遊び、海門に次り、夢*菴信禅師の真讃を作す。金壇に参*政湯公致遠に謁し、溧陽に方*外の道友、劉季高侍郎を訪ね、道を荊谿に取りて帰る。顧*凱之の画く所の維摩像に跋す。四月、事を径山に謝す。五月の初一、遂に請われ知*省李公伯和の銭を施して重ねて明月堂を建て、師の佚老の居と為さしむ。秋、受業に往き、慶*讖輪蔵す。行*記を按ずるに（云く）、「妙喜老師、辛巳（一一六一）の夏、事を径山に謝し、朝に請うを得たり」。九月、山東に之く。歴*陽の張孝祥、宣城より来って致敬して法要を請い、別れに衣盂を施す。重ねて選仏堂を建つ。銭*処和侍郎の讃を作す。

三十二年壬午

師七十四歳。居明月堂。雖老而益健。以法求人接物為己任。学徒益親賢搢紳為道、而至者無虚日。三月、①之金陵、謁丞相都督張公徳遠。按塔銘曰、師雖方外士、義篤君親、毎及時事、愛君憂時、見之詞気。晩自径山、来秣陵、見某言、先人不幸無後。某之責、願乞一給使。名藉公重、庶有肯就者。某為惻然興歎。遂奏其族弟道源、奉師親後。　孝宗皇帝即位之九月、　詔師問仏法大意。適師臥疾。　特賜大慧禅師号、以為褒寵。二十八日、受命。以頌謝招討李公顕忠施観音像。作祭栄侍郎」（61 a）文。

①三＝二㊥。

三十二（一一六二）年壬午。

師、七十四歳。明月堂に居す。老たりと雖も益ます健なり。法を以って人を求め物に接するを己が任と為す。学徒、益ます親賢搢紳の道と為して、至る者、虚日無し。三月、金陵に之き、丞相都督張公徳遠に謁す。塔*銘を按ずるに曰く、「師、方外の士と雖も、義、君親に篤くして、時事に及ぶ毎に、君を愛し、時を憂うこと之を詞気に見わす。晩に径山より、秣陵に来って、某を見て言く、『先人、不幸にして後無し。某が責、願くは一給使を乞う。名藉公重ならば、庶くは肯って就く者有らん』。某、為に惻然として歎を興す。遂に其の族弟道源を奏して、師の親後を奉ぜしむ」。孝宗皇帝の即位の九月、師を詔して仏法の大意を問う。適たま師、疾に臥す。特に大慧禅師の号を賜い、褒寵と以為う。二十八日、命を受く。頌を以*って招討李公顕忠の観音像を施すを謝す。栄*侍郎を祭る文を作す。

孝宗皇帝隆興元年癸未

師七十五歳。正旦、作鄭禹功双槐堂記。三月、聞王師凱旋、作偈曰、氛埃一掃蕩然空、百二山河在掌中。世・出世間俱了了、当陽不昧主人公。出衣盂、命闔山清衆、閲華厳経七百余部、用祝　両宮聖寿、保国康民。六月、之寧国、上①冢葺治。七月初一日、還山。　上復取向所賜　宸翰、以御宝識之、曰賜大慧。十二日、師已示微恙。大衆力請説法於千僧閣、以為末後垂訓。師委曲付嘱。老僧来日無多、汝等侍吾之久。宜各随所縁、以仏法為念。」（61 b）莫負初志。実吾所願。其語懇励至切。于時衆皆悲感。十四日夜、

有大星隕于寝室之後、流光有声。師聞微笑曰、吾将行矣。八月初二日、凌晨、法鼓震裂。初九日、薄暮、学徒識師無意於世、環擁寝室。師以手揺曳曰、吾翌日始行矣。至五鼓、親書遺奏曰、臣宗杲、深荷　聖恩。臣今年已衰、遂辞　聖世。伏願陛下為天下生霊、保衛　聖躬、力致太平、永光仏法。臣宗杲、上奏。及作丞相張公徳遠書。以端石硯寄、別丞相湯公進之、以外護吾宗為嘱。仍書委曲以示参徒曰、吾歿之後、叢林自有常典。切不可過儀。小師不得披麻戴孝。慟哭過情、恐混世俗。所蓄」(62a)書画、老僧平日至愛道友彦・光、各送一本、庶以表意口授。委曲付諸嗣法云、吾自夏及秋、不美[2]飲食。雖無甚疾苦、而幻体日見羸劣。蓋世縁止於此也。汝既応縁一方、宜更堅持願力、以報仏祖深恩。是吾之望。臨行以数語為別。各宜悉及。了賢等請偈。師厲声曰、無偈便死不得也。衆告既切。不得已而書付了賢、呈大衆。云、生也只恁麽、死也只恁麽。有偈与無偈、是甚麽熱大。投筆就寝、吉祥而逝。按主喪事臨安府察判羅公公旦祭文曰、法鼓晨裂、流星夜墜。剡尺紙以上奏、即吉祥而飆逝。度門弟子浄初等、八十四人。嗣法、自教忠弥光・西禅鼎需・東」(62b)禅思岳・薦福悟本・能仁祖元・東林道顔・西禅守浄・育王遵璞・開善道謙・伊山冲密・潙山法宝・雪峰慧日禅師蘊聞・浄居妙道・資寿妙摠[3]・明因慧照、而次数過百十、星分棊布、列刹相望、皆其的子。親孫潜通密証、匿耀韜光、唯恐有聞於世者、殆不可勝数。士大夫、恪誠扣道、親有契証、如参政李公邴・侍郎曽公開・侍郎張公九成・吏部郎中蔡公枢・給事中江公安常・提刑呉公偉明・給事中馮公檝・中書舎人呂公本中・参政劉公大中・直宝文閣劉公子羽・中書舎人唐公文若・御帯黄公彦節・兵部郎中孫公大雅・編修黄公文昌・楞伽居士鄭昂・秦国夫人」(63a)計氏法真・幻住道人智常・超宗道人普覚。摳衣与列、佩服法言、如内翰汪公藻・参政李公光・枢密富公直柔・侍郎劉公岑・侍郎曽公幾・侍郎徐公林・枢密楼公炤・尚書汪公応辰・左丞相湯公思退・侍郎方公滋・提挙李公琛・侍郎栄公嶷・尚書韓公仲通・内都知昭慶軍承宣使董公仲永・成州団練使李公存約・安慶軍承宣使張公去為・開府保信軍節度使曹公勛・中書舎人張公孝祥・御帯寧遠軍節度使黄公仲威・直殿鄧公靖・無住居士袁祖巌。其余空而往、実而帰者、衆矣。是月二十日、衆以全身、葬于明月堂之後。申明於朝、以所居為菴、仍建層」(63b)閣、奉安宸翰。按丞相湯公書云、禅師道徳、　聖上所慕。易菴建閣、計皆得可。塔名師号、当為奏知。按塔銘曰、隆興元年八月十日、大慧禅師、示寂于径山明月堂。　皇帝聞之嗟惜。詔以明月堂、為妙喜菴。賜謚普覚、塔名宝光。其徒以全身、葬于菴之後。卒被光寵、表之無窮。誠有以自致也。所賜　御書、建閣蔵於菴。与玆山不磨矣。其八処九会陞堂語要・普説・小参・讃

偈・機縁・長牋・法語、無慮数十万言。参徒道印、編為六十巻、奉置于菴。宗璉・曇密・惟禋・宗演・浄智居士黄文昌、裒其綱要、離為五冊、刊行於[④]世、蒙　詔」（64 a）賜入大蔵、同聖教、以永其伝。師之愛人及物、等之以慈。怒罵嬉笑、得之天真。機弁迅雷霆、語言燦星斗。具大眼目、擒縦自如、破諸方之異解、死学者之偷心。必令実証実悟得大自在而後已。所以始従分圜悟半座、至於数領菴園。一住鄮峰、両坐双径。奔走天下奇衲、悦服名公巨儒。如優曇花一現於世。以至上達　天聴、感動宸衷、特垂叡語之褒、旌以徽名之寵。奎章宝墨、雲漢昭回。仏日重光、真風普被。其所摂化、傾倉倒廩、唾玉揮金。誠心楽施、唯恐其後。而師喜済恵、随得随与、況於細行、毫髪無虧。雖遷遐裔、竜象擁随、忍死不棄。及其示寂、如失」（64 b）恃怙、竜神為之戴白。（竜王聖属出現綵亭之上、挙衆見其冠白。[⑤]）鳥獣為之哀号。賢士大夫、写詞致哀動、逾百数。此皆法雨之所潤、恩人利物之大凡也。若其荷仏祖重任、恢臨済正宗、号令人天、指呼凡聖。殆非筆舌所能紀。今以平生出処大略、列歳月而編次。及前後之所聞見、敬録其実、以為万世標[⑥]準、云。

①冢＝冢㊊㊁。②美＝羑㊐。③摠＝總㊐。④於＝于㊐。⑤綵＝草㊁。⑥標＝摽㊊㊁

孝宗皇帝隆興元（一一六三）年癸未。

師、七十五歳。正旦、鄭*离功の双槐堂の記を作す。三月、王*師の凱旋を聞きて偈を作して曰く、「氛埃一掃して蕩然として空ず。百二の山河、掌中に在り。世・出世間、倶に了了たり。当陽、主人公を昧まさず」。衣盂を出して、闔山の清衆に命じて、華厳経七百余部を閲し、用いて両宮の聖寿を祝い、国を保ち民を康からしむ。六月、寧国に之き、上冢（じょうちょう）して葺治す。七月初一日、山に還る。上、復た向（さき）に賜う所の宸翰を取（めしあ）げて、以って御宝に之を識して曰いて大慧と賜う、と。十二日、師已に微恙を示す。大*衆、力（つと）めて説法を千僧閣に請い、末後の垂訓と以（おも）為う、師、委曲して付嘱す。「老僧、来日、多無し。汝等、吾を待つこと久し。宜しく各おの所縁に随って仏法を以って念と為すべし。初志に負ること莫れ。実に吾が願う所なり」。其の語、懇励して至って切なり。時に衆、皆な悲感す。十四日の夜、大星有って、寝室の後に隕（お）ち、流光して声有り。師、聞いて微笑して曰く、「吾、将に行かんとす」。八月初二日、凌晨、法鼓、震裂す。初九日、薄暮、学徒、師の世に意（おも）うこと無きを識り、寝室に環擁す。師、手を揺曳して曰く、「吾、翌日、始めて行かん」。五鼓に至って、親しく遺奏を書して曰く、「臣宗杲、深く聖恩を荷う。臣、今年已に衰い、遂に聖世を辞す。伏して願くは、陛下、天下の生霊の為に、聖躬を保衛し、力めて太平に致し、仏法を永光せんことを。臣宗杲、上奏す」。及び丞*相張公徳遠の書を作す。端石の硯を以って寄せて、丞*相湯公進之と別れ、吾が宗を外護するを以って、嘱と為す。仍ち委曲を書して以って参徒に示して曰く、「吾、歿して後、叢林自ら常典有り。切に儀を過すべからず。小師、披麻戴孝を得ざれ。慟哭情に過ぎ、世俗に混ずるを恐る」。蓄うる所の書画、老僧の平

日の至愛の道友彦・光、各おの一本を送り、庶くは以って表意口授せん。委曲に諸の嗣法に付して云く、「吾、夏より秋に及び、飲食を美くせず。甚だ疾苦無しと雖も、幻体日に羸劣を見る。蓋し世縁、此に止む。汝ら既に縁に一方に応じ、宜しく更に願力を堅持して、以って仏祖の深恩に報ゆべし。是れ吾が望みなり。行くに臨んで数語を以って別れと為す。各おの宜しく悉く及ぶべし」。了賢等、偈を請う。師、声を厲くして曰く、「偈無くして便ち死ぬことを得ざるや」。衆告ぐること既に切なり。已むことを得ずして、書して了賢に付して大衆に呈す。云く、「生や只だ恁麼し、死や只だ恁麼し。偈有ると偈無しと、是れ甚麼の熱大ぞ」。筆を投げて寝に就き、吉祥にして逝く。主喪事の臨安府察判羅公公旦の祭文を按ずるに曰く、「法鼓、晨に裂け、流星、夜に墜つ。剡尺紙に以って上奏し、即ち吉祥にして飄逝す」。門弟子を度すること浄初等、八十四人。法を嗣ぐもの教忠弥光・西禅鼎需・東禅思岳・薦福悟本・能仁祖元・東林道顔・西禅守浄・育王遵璞・開善道謙・伊山冲密・潙山法宝・雪峰慧日禅師蘊聞・浄居妙道・資寿妙揔・明因慧照より数を次いで百十を過ぎ、星の如くに分れ碁の如くに布き、列刹に相に望むは、皆な其の的子なり。親孫潜かに密証に通じ、耀を匿し光を韜み、唯だ世に聞くこと有るを恐るる者、殆んど勝げて数うべからず。士大夫、誠を恪め道を扣き、親しく契証有るは、参政李公邴・侍郎曾公開・侍郎張公九成・吏部郎中蔡公枢・給事中江公安常・提刑呉公偉明・給事中馮公檝・中書舎人呂公本中・参政劉公大中・直宝文閣劉公子羽・中書舎人唐公文若・御帯黄公彦節・兵部郎中孫公大雅・編修黄公文昌・楞伽居士鄭昂・秦国夫人計氏法真・幻住道人智常・超宗道人普覚の如し。摳衣して列に与し、法言を佩服するは、内翰汪公藻・参政李公光・枢密富公直柔・侍郎劉公岑・侍郎曾公幾・侍郎徐公林・枢密楼公炤・尚書汪公応辰・左丞相湯公思退・侍郎方公滋・提挙李公琛・侍郎栄公蕤・尚書韓公仲通・内都知昭慶軍承宣使董公仲永・成州団練使李公存約・安慶軍承宣使張公去為・開府保信軍節度使曹公勛・中書舎人張公孝祥・御帯寧遠軍節度使黄公仲威・直殿鄧公靖・無住居士袁祖厳の如し。其の余の空にして往き、実にして帰る者、衆し。是の月の二十日、衆、全身を以って、明月堂の後に葬る。朝に申明して所居を以って菴と為し、仍ち層閣を建て、宸翰を奉安す。丞相湯公の書を按ずるに云く、「禅師の道徳、聖上の慕う所なり。菴を易えて閣を建て、計るに皆な可を得。塔名師号、当に奏知為るべし」。塔銘を按ずるに曰く、「隆興元（一一六三）年八月十日、大慧禅師、径山の明月堂に示寂す。皇帝、之を聞いて嗟惜す。詔して明月堂を以って妙喜菴と為す。謚を普覚と賜い、塔を宝光と名づく。其の徒、全身を以って菴の後に葬る」。卒に光寵に被り、之を無窮に表す。誠に以って自致有るなり。賜う所の御書、閣を建て菴に蔵む。玆の山と与に磨らざるなり。其の八処九会の陞堂の語要・普説・小参・讃偈・機縁・長牋・法語、無慮そ数十万言なり。参徒道印、編して六十巻と為し、菴に奉置す。宗璉・曇密・惟禋・宗演・浄智居士黄文昌、其の綱要を裒め、離けて五冊と為し、世に刊行し、詔して賜って大蔵に入るを蒙り、聖教と同じく以って其の伝を永しむ。師の人を愛し物に及ぼすは、等しく之に慈を以ってす。怒罵嬉笑、之を天真に得

たり。機弁は雷霆より迅く、語言は星斗に燦たり。大眼目を具し、擒縦自如にして、諸方の異解を破し、学者の偸心を死せしむ。必ず実証実悟をして大自在を得せしめて後に已む。所以に始め圜悟の半座を分けてより、数しば菴園を領するに至る。一たび*鄮峰に住し、両たび双径に坐す。天下の奇衲を奔走させ、名公巨儒を悦服せしむ。優曇花の世に一現するが如し。以って上、天聴に達し、宸衷を感動するに至り、特に叡語の褒を垂れ、旌すに徽名の寵を以ってす。奎章宝墨し、雲漢昭回す。仏日重光し、真風普く被う。其の摂化する所、倉を傾け廩を倒し、玉を唾し金を揮う。心を誠にし施を楽い、唯だ其の後れんことを恐るのみ。師、済恵を喜び、随得随与す。況んや細行に於てをや。毫髪も虧ること無し。遐裔を遷ると雖も、竜象、擁随し、死を忍び棄てず。其の示寂に及び、恃怙を失うが如く、竜神、之が為に白を戴く。〈竜王聖属、綵亭の上に出現す。衆を挙げて其の冠の白を見る〉。鳥獣、之が為に哀号す。賢士大夫、詞を写し哀動を致すこと百数を逾ゆ。此に皆な法雨の潤う所、人を恩み物を利する大凡なり。若し其の仏祖の重任を荷えば、臨済の正宗を恢め、人天を号令し、凡聖を指呼す。殆んど筆舌の能く紀する所に非ず。今、平生の出処大略を以って、歳月を列して編次す。前後の聞見する所に及び、敬って其の実を録して、万世の標準と以為うと云う。

大慧普覚禅師年譜終。①」（65 a）

①終＝ナシ㊧㊁。（65 b）ハ白紙。

大慧先師、示現七十五年、言行出処、章章可法。詠老、集為年譜、刊行於世、有補来学。但其間不能無誤脱。宗演、頃在衆時、毎覧之、輙為嗟惜。後得江西瑩雲臥書、亹亹譏其闕失。与昔所聞、果若符契。逮開禧乙丑、青山無事、始獲校訂、刪入六十余処、粗得無差。噫、雲臥侍師於衡・梅。可謂親聞飫見。与」（66 a）育王・双径之会、捨拙陋、存亦無幾。今若不正之、則是非之弁、不息由今。而後学者、閲繹無疑、奮烈丈夫志、追跨前作。臨済墜地之緒、庶可起焉。若真具大闡提、火此書可也。或未然、毋忽亀鑑。住華蔵比丘宗演、百拝敬書。

*大慧先師、示現の七十五年の言行出処、章章、法なるべし。詠*老、集めて年譜と為し、世に刊行す。来学に補有り。但だ其の間に誤脱無きこと能わず。〈*宗演〉、頃ろ衆に在る時、之を覧る毎に、輙ち為に嗟惜す。後に*江西の瑩雲臥の書を得て、亹亹として其の闕失を譏る。昔、聞く所と果して符契するが若し。開禧乙丑（一二〇五）に逮んで、青山無事にして、始めて校訂を獲、刪するに六十余処に入り、粗ぼ差い無きを得たり。噫、雲臥、師に衡・梅に侍せり。謂つべし、親しく聞き飫見す、と。育王・双径の会と与に拙陋を捨てて存すは亦た幾んど無し。今、若し之を正さずんば、則ち是非の弁、息ざること由お今のごとし。後学の者、閲繹して疑い無く、丈夫の志を奮烈し、前作を追跨せよ。臨済の地に墜つの緒、庶くは起すべきこ

とを。若し真に大闡提を具せば、此の書を火すも可なり。或は未だ然らずんば、亀鑑を忽せにすること毋れ。華蔵に住する比丘〈宗演〉、百拝して敬書す。

宝祐癸丑、天台比丘徳濬、募縁重刊于径山明月堂。」(66b)

①㊀ハ「宝」以下ナク別ノ刊記アリ。(補1)。②㊁ハ次ノ六七丁ニ祖謙ノ上啓ノ文ト刊記アリ。(補2)。

宝祐癸丑(一二五三)、天台比丘徳濬、募縁して径山明月堂に重刊す。

補1　嘉興包檉芳、施銀拾両、刻年譜壱巻。

嘉興の包檉芳、銀拾両を施し、年譜壱巻を刻す。

補2　寛永廿癸未歳、孟春吉辰。沢田庄左衛門刊行。

寛永廿〈癸未〉(一六四三)の歳、孟春吉辰。沢田庄左衛門、刊行す。

(つづく)

(一九七九・一二・一四)